

Kuamudomsomboun クアムチャイクアン

2016年度 ラオス国際協力研修報告書 2016年10月発行 [豊かさ]



LAO
PEOPLE'S
DEMOCRATIC
REPUBLIC



2016年研修テーマ

豊かさ再考

ラオスの農村から学ぶこと



Vol.01

学習院女子大学
Gakushuin Women's College



学習院女子大学
Gakushuin Women's College

目次

INDEX

はじめに

ラオス研修について.....	p.3
今年度のテーマについて.....	p.4
ラオスの基本情報.....	p.5～6

第1章 事前学習・活動

ワークショップ・グループワーク	p.8～9
援助とは	
仕事・役割とは	
近藤牧子氏によるワークショップ	
豊かさを考える発表	
ラオランチの活動.....	p.10
Tシャツづくり.....	p.11

第2章 ラオスでの活動

行程表.....	p.13
INラトゥアン村	p.14～22
ラトゥアン村とは	
子どもとの交流	
ワークショップの様子	
ホームステイ報告	
バーシーの儀式・コープチャイパーティー	
～お別れ・感謝の会～	
INルアンパバン	p.23～24
ナイトマーケット	
托鉢	
象乗り体験	
世界遺産	

INビエンチャン	p.25～27
ラオス国立大学の学生と交流	
ラオスのこども	
車いすバスケット選手との交流	
自由研修	

第3章 研究・報告

村でのワークショップ.....	p.29～36
子どもとの交流班.....	p.37～38
ラオス国立大学生ワークショップ.....	p.39～41
車いすバスケット班.....	p.42～44
開発教育(KK)班	p.45～48
報告会.....	p.49
個人感想.....	p.50～56

第4章 おわりに

振り返り.....	p.58
挨拶.....	p.59～60
お世話になった方々.....	p.61
おわりに.....	p.62





はじめに

Introduction

ラオス研修について

佐藤由理

ラオス研修は学習院女子大学の国際協力研修のうちのひとつである。二〇〇四年度から行われ、今年は一七回目の実施となる。研修の参加者は春学期の週一回の事前授業を行った後、夏休みに一週間ほどラオスに訪れる。主に村でのホームステイで、村人との交流の中から学ぶことを大切にしている。今年の参加者は一年生から三年生までの一九人で、ラオスへ向かったのは一六人である。皆がこの研修に参加した理由は様々であるが、各々が担当するラオスでの活動を成功させるため、村でのホームステイをより充実したものにするため、意見を交わしながら一致団結してきた。このように自分達で考え、活動を実行し、そこから得た情報をこの報告書や後に行われる中学校での授業で発信することがラオス研修の醍醐味である。普段から世界に目を向けている学習院女子大学の学生だからこそできる国際交流活動や情報発信であると思う。この報告書は二〇一六年度の活動報告・分析・及び今後の私達の活動を記したものである。ぜひ最後まで読んでいただければ幸いである。

今年度のテーマについて

佐藤由理

今年で一七回目になるラオス研修であるが、毎年異なるテーマが掲げられる。現地での交流を時代に合わせ、より良いものとするためである。今年度のテーマは「豊かさ再考」ラオスの農村から学ぶこと」である。ラオス研修では、一方的に見る・聞くだけの活動ではなく、「相互交流を通じ学ぶこと」を大切にしており、そのために事前学習で意見を交わし、話し合いを重ね、万全な準備を行う。今年度のテーマから私達は「豊かさとは何だろう」という疑問を挙げ、事前授業において話し合いを重ねた。勉強と話し合いを通し、多様な豊かさの定義があること、また、豊かさの項目の重要性が国によって異なることが明らかになっていった。そこで、私たちは、日本そして研修をするラオスでは一体豊かさとは何か、人々は何を大切にしているのかを知りたいと思った。そこで私たちは豊かさ調査・豊かさ指標を使ったワークショップを日本とラオスでの活動の中で行うことになった。具体的には、「お金」「時間」「教育」「治安」などの数種類ある項目から自分にとっての豊かさの優先順位を決めるというものである。国籍、年齢、性別、仕事等による相違があるのか、どういった要因・背景で人は何を豊かと感じるのか等の疑問を少しでも明らかにしたかった。このワークショップを通して「豊かさとは何か」という問いに対し、考え、学ぶことがたくさんあった。

ラオス基本情報

【国名】
ラオス人民民主共和国

【位置】 地図参照



【面積】
二四万平方キロメートル

【人口】
約六四九万人（二〇一五年、ラオス統計局）

【首都】
ビエンチャン

【民族】
ラオ族（全人口の約半数以上）を含む計四九民族

【言語】
公用語はラオス語（民族によって独自の言葉を話す）

【気候】
一般に雨季と乾季に分けられる

【宗教】
仏教（上座部仏教）

【通貨】
単位はキープで、紙幣のみ。一万キープが約一三〇円。

【議会】
一院制

ラオスの歴史

一三三三年、ランサーン王国が建設された。一八九九年、フランスのインドシナ連邦に編入される。一九五三年十月三日、仏・ラオス条約により完全独立し、ラオス王国が成立した。その後は東南アジア諸国連合（ASEAN）に加盟するなどし、一九七五年十二月、ラオス人民民主共和国が成立した。一九九〇年代になると市場経済化の動きは本格化し、経済分野だけでなく、社会・政治・外交などの面でもグローバル化が進んでいる。

ラオスの文化

伝統文化として、手織物や竹製品などがある。また、生活では仏教の影響を受けるだけでなく、森林に棲む精霊への信仰も見受けられる。伝統的な楽器としては、竹製のモーラムやケーン（笙のルーツとも言われる）がある。現代の若者文化としては、都市ではカフェ・レストラン・クラブ・バーなどで過ごすという楽しみ方が増えた。映画鑑賞やカラオケを娯楽に加え、ボウリングに至っては若者に限らず、中高年の間でも人気がある。

ラオスの宗教

ラオスは仏教国であるため、托鉢が行われる様子が見られる。僧侶が喜捨を求めて町を練り歩く。首都ビエンチャンでも見られるが、規模が圧倒的なものはルアンパバンである。朝五時〜六時頃に

行われ、基本的にはお寺の周囲を歩く。第二章の托鉢のページにも書かれている。寺院で有名なのは、ワット・シェントーンやタート・ルアンなどである。

ラオスの経済

通貨単位はキープである。GDPは、一人当たり一七六〇米ドルで、ASEAN諸国の中ではカンボジアとミャンマーに続き少ない。主要な貿易品目は、輸出品は銅製品・電力・銅鉱石であり、輸入品は電気機器・機械・燃料だ。主な貿易相手国はタイや中国、ベトナムなどの隣接国である。

参考文献・資料

- 外務省 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/laos/>（最終閲覧日：二〇一六年九月一五日）
- 目で見えるASEAN-ASEAN 経済統計基礎資料 www.mofa.go.jp/mofaj/files/000127169.pdf（最終閲覧日：同上）
- ラオランチ発表内容



ワークショップ・グループワーク

援助とは

永川愛佳

二回目の授業では「開発途上国のある村での話」をテーマに、援助のあり方について議論した。外国人が寄付した一万ドルの現金をその村がどのように使うのが適切なのかについて、村長、長老、女性、若者のリーダー等の疑似的な立場で議論した。異なる立場によって様々な意見が出た。援助を受け入れることに前向きな人もいたが、外部からの援助を受けることで村の伝統や文化がなくなってしまうのではないかという援助に対し懸念する意見もあった。このワークショップを通じて援助をすることが必ずしも開発途上国の人々にとって良いことばかりではないということに気づかされた。援助する側の人間は、開発途上国の人々が何を求めているのかを見極めていく必要があるということも認識できた。

仕事・役割とは

古谷理恵

次の授業では、普段の生活の中で行うこと、例えば「料理を作る」や「お風呂掃除」など、家族の誰が担当しているかを書き出し、頻度を基に点数を付けた。私は両親と三人家族であるが、結果を見ると母が断然多く、父と私が同じくらいであった。母は主婦であるが、家での仕事は自分にも関係があるのに母に任せっきりという点が改めて認識させられた。また、家によっては父親が掃除や買い物好きな場合もあったが、平均的に見ても圧倒的に母親の役割である。これらのことは、ラオスとの比較を行える一つの項目となりそうだ。また、絶対に決まった役割を設けてはいないことも、家にいる時間の長い人に仕事をしてもらう原因かもしれないと考えられた。

近藤牧子氏による ワークショップ

鈴木のぞみ

NPO法人「開発教育協会」から近藤牧子氏をお招きし、ワークショップを開催していただいた。内容は「社会相関図」づくりを目的とし、自分の名前を紙の中央に書き、自分の生活に関係する人や場所等（例えば家族や友達、所属サークルやアルバイト、好きなものや好きなこと）をどんどん書き出していくというものであった。このワークショップを通して、自分が日頃接する大学やサークルの仲間に加え、様々な場所に出向き、行動範囲が広いことを認識した。また、それだけでなく共にラオスで過ごすメンバーのことを、それまで以上に知るきっかけとなったのもこのワークショップであった。現地でお会いする方々との交流の際も、その人を形作ってきたものを知ることが、より深い交流につながるのだと感じた。



第1章

事前学習・活動



竹籠作り体験

豊かさを考える発表

奥川優里奈

「豊かさとは」を考える上で参考になる指標・項目を、様々なデータベース、文献を班で発表し合いながら、何が豊かさで捉えられるのかについて考えてみた。既存の国際的および日本の指標がどのような背景、目的で構築されたか、また、先進国や発展途上国など、地域によってどのような豊かさに対する考えの違いがあるのか等を学ぶ事ができた。

参考にしたデータベースの1つ「OECD How's Life 2015」がある。ここには大きく分けて十一の項目（所得と財産、雇用と収入、住宅、健康状態、仕事と生活のバランス、教育と技能、社会とのつながり、市民参加と統治、環境の質、安全、主観的幸福）が掲載されており、これらの

項目がそれぞれのように相關しているかを検証している。私達の発表では「主観的幸福」の項目に焦点を当て、人々がどれだけ自分の生活に満足しているかという「生活満足度」の高低によって、他の項目の充足度にどのように相關するか考察した。その結果生活満足度が高い国は社会的なネットワーク、水質に対する満足度、雇用率などの値が高くなっていた。また、GDPの低い国と高い国の比較も行ったところ、前者が教育到達度に幸福を感じるのに対し、後者は収入の高さであることが分かり、GDPの値も考慮する必要性が感じられた。

このような各班の発表を踏まえ、クラス内全員で、実際にラオスの豊かさををはかる為に必要な項目をまとめていった。その結果出たのは、仕事・お金、コミュニケーション、治安、衛生環境と健康、将来性、余裕

ラオランチの活動

永井詩織

私達はラオスに行く前に毎週火曜日のお昼休みに集まってラオス語の勉強を行った。なぜこのような勉強会を開催したかと言うと、研修中に三日間ラオスのライフスタイルを体験するためホームステイを行うからだ。通訳してくれる方がいたとしても、挨拶や自己紹介など日常会話等は話せた方が彼らとの距離を縮めるきっかけになる。私は二年前にもラオス国際協力研修に参加したが、そのときも言葉の重要性を強く感じた。実際にラオス人にお会いすると、聞きたいことがたくさん出てくるが、なんと伝えればよいかわからず悔しい思いをした。もっとラオス語が話せたらもっと知れることもあったし、より円滑に現地調査が進

むと実感した。そのため、事前準備としてラオス語を学ぶことはとても重要なことである。

私達は基本的な挨拶から体調の悪さを伝える単語など、様々な状況を想定した言葉の勉強を行った。さらにラオスの基本情報（ラオスの国旗や伝統文化など）を、1グループ5人程度で発表を行った。またしっかりと身に付けてもらうため単語テストも行った。

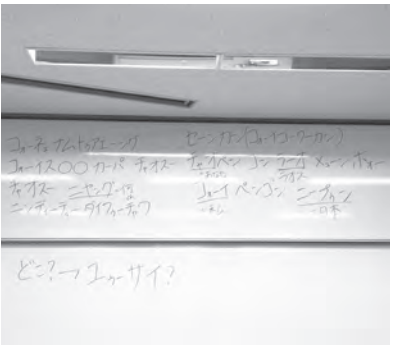
さらに、発音に関しても学習院女子大学の交換留学生の方に協力していただき、実際の発音を聞き、強弱やイントネーションもできるだけネイティブスピーカーと同じ発音を意識して学んだ。このように様々な方法で学びを深めることを心がけた。授業最終日

教育、文化・伝統、平等な社会の九つである。この中の一つには、自身のグループが提案した、社会的なコミュニケーションや水質に対する満足度（＝衛生環境と健康）なども反映されている。そしてこれらを使用し、自分達の豊かさをはかる項目の話し合いも行った。結果、最も重視すべきなのは衛生環境と健康、次に仕事・お金、コミュニケーション、次に治安、教育、平等な社会、次に将来性、余裕、最後に文化・伝統というものになった。このように日本に住む私達が出した結論を、ラオスの方々が出したものとの比較を行いながら、地域ごとの「豊かさ」を知っていく事が必要なのだと分かった。

扱ったデータ
● OECD "How's Life 2015"
http://www.keepeek.com/Digital-Asset-Management/oecd/economics/how-s-life-2015_how-life-2015-en#page8

には、親睦をより深めるためピザパーティーを開催した。それでも最後の総復習としてクイズ大会を行った。ラオスの基本情報（ラオスの国旗など）から勉強してきたラオス語を題材にしたものであった。かなり本格的に勉強会を行っていたこともあり、みんなしっかりと答えられていた。現地での様子では、一人一人がラオス人と楽しく会話しているのが見られ、改めて事前にラオス語の勉強をしていてよかったと感じた。

ラオランチ班：大岩・永井





第2章

ラオスでの活動

Tシャツづくり

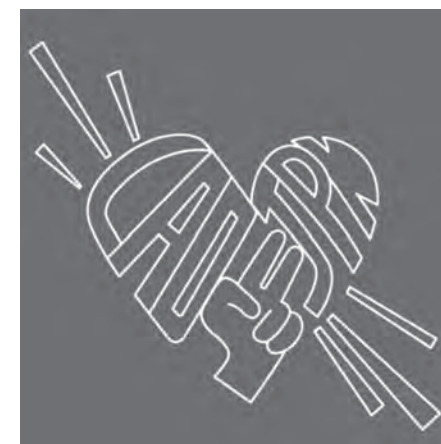
私達研修生は毎年、ラオスTシャツと称して自分達でデザインしたTシャツの作成に取り組んでいる。色やデザインは係を中心に研修生全員で考え、二〇一六年ラオス国際協力研修参加者だけのオリジナルTシャツを作成した。今年はグリーン地にバックプリントを施し、JPN（JAP AN）とLAO（LAOS）の文字でハート型を作る斬新なデザインとなった。業者とのやり取りや、デザインの構成、経費の相談など、すべて自分達で取り組み、自分達だけのオリジナルを作ることができた。事前学習やグループでの活動などの合間で、慌ただしい面もあったが完成した実物を見た瞬間大きな達成感が得られた。完成したTシャ

原萌子

ツは、現地に持って行き、村で着用することが毎年恒例となっている。毎日暑い中で、中には屋外で歩き回る活動もあったため、薄地のTシャツは大いに役立ったように感じる。また研修生だけでなくグリーンディスカバリーや、ラオス人大学生、ホームステイ先、他関係者の方々にもTシャツを配布し、最終日に皆で着用した。同じTシャツを着ることで一体感が生まれ、三日間共に過ごした仲間達との間にさらなる団結力が生まれた気がした。皆でおそろいのTシャツを着て撮った集合写真は大変思い出深いものとなった。ホームステイ先へのプレゼントとして渡したTシャツも、家族皆が

喜んでくれた。これを見て、いつでも家族皆が私たちと過ごした日々を思い出してくれることを願っている。当時の思い出が形として残ることはとても嬉しく、Tシャツの作成はこのラオス研修でも重要な役割を担っていることは間違いない。そして、Tシャツを受け取った時の皆の笑顔と喜びが何よりも嬉しく、私たちがとっても最高に心に残る経験となった。

Tシャツ班：鈴木・原



IN ラトゥアン村



一九九五年に「ルアンパバン」の名称で世界遺産に登録されているラオス北部の古都であるルアンパバンからバスで三時間、さらに船で四十分乗ってラトゥアン村に向かった。ラトゥアン村には四世帯、二六七人の村人が住んでいる。ラトゥアン村の人々は元々、ルアンパバン県の東に隣接するフアパン県付近に住んでいた。しかし戦争や事故などの影響によって村人はラトゥアン村に移住した。ラトゥアン村では男性が比較的楽な仕事として竹を編んで籠を作り、女性は主食としているもち米の粳すりなどの肉体労働を行う。村には一つ小学校があり、一年生から五年生の子供達五四人が通っている。小学校卒業後、進学を望む生徒はラトゥアン村から別の大きな村の中学校に通わなくてはならない。ガスは通ってなく、電気は各世帯別に太陽光発電か川からの水力発電に頼っており、普及が十分とは言えず住みやすい環境とは言えない。しかし、ラトゥアン村での一日はゆったりとしており村人同士が家事をしながら会話を楽しんだり、子供達は仲良くにぎやかに外で遊ぶなど日本とは異なる時の流れを感じることができた。

ラトゥアン村とは

宇田川史織

ラオス研修行程表



8月28日	ルアンパバンへ	
8月29日	ラトゥアン村へ	家族と一緒に夕飯づくり
8月30日	ラトゥアン村	竹籠作り お米のもみから取り体験
8月31日	ラトゥアン村	小学生との交流村人のみなさんと ワークショップ
9月1日	ラトゥアン村	コプチャイパーティーとバーシーの儀式 村人のみなさんとお別れ
9月2日	ルアンパバン	托鉢 ぞう乗り プーシーの丘&世界遺産観光 ナイトマーケット
9月3日	ビエンチャン	ラオス大学生と交流 車いすバスケットの方と交流
9月4日	ビエンチャン	ラオスのこども訪問 自由研修
9月5日	日本へ	

子どもとの交流

子ども班の活動報告

佐藤由理

村についてから、3日目の午前子ども班のアクティビティが行われた。場所は村の外れにある小学校である。集まった子どもは40人程であった。私達子ども班はアクティビティとして①だるまさんが転んだ②竹とんぼ作り③紙芝居（1〜3年生）orワークシヨップ（4〜6年生）を行った。

だるまさんが転んだ

最初の「だるまさんが転んだ」は子ども達と仲良くなるためのアイスブレイクとして行った。「だるまさんが転んだ」という遊びはラオスにはない遊びのため、理解してくれるか不安であったが、見本を見せたり、ゲームを行うとともに段々理解して行き、最後の方は子ども達皆笑顔で楽しんでいった。

竹とんぼづくり

次の竹とんぼ作りは、竹とんぼに自分の好きな絵や文字、自分の名前を書いて、カラフルなものにしてみよう、最後に外に出て飛ばすというプログラムである。女の子はお花の絵などを用いカラフルで可愛いらしいものが多く、男の子はどちらかというとシンプルなものが多い印象であった。案が浮かばず、筆が進まない男の子もいたが、そんな子に書いてあげる子がいたのが印象的であった。外に出て竹とんぼを飛ばす時間になると、男の子はやはり上手ですぐに飛ばせるようになっており、笑顔で楽しそうに飛ばしていた。あまりにも高く飛ばしてしまったために、学校の屋根の上まで飛ばしてしまった子もいた。

紙芝居

その後、低学年と高学年に

分かれ、低学年の子とは紙芝居を、高学年の子とは豊かさ指標を使ったワークシヨップを行った。

紙芝居の方には20人程が集まってくれた。子ども達に読んだ紙芝居は「スックおじさん」というものである。ストーリーとしては、スックおじさんと動物達が船に乗っているが、動物達のケンカにより船が壊れてしまい、バラバラにはぐれてしまった動物達を探しに行くというストーリーである。今回は紙芝居を少し書き変え、スックおじさんが動物を探すシーンで、子どもを参加させることにした。子どもに参加を促した時には少し戸惑い、恥ずかしがっている様子であったが、動物役の子どもと、動物を連れてくる子どもに協力してもらい、見事全ての動物がスックおじさんの元へ集まることができた。紙芝居は二度読み、学生が読



竹とんぼとばし



だるまさんがころんだ

んだ後、二度目は紙芝居のお話を子ども達に読んでもらうことを目的としていたが、ラオ語がまだ読めなかったり、理解できない子どもが多かったため、予想していた通りとは行かなかった。しかし、楽しそうに動物役をしてくれた子どもも多かったため、紙芝居というものを通して、楽しくラオ語を学ぶ機会になっていたら幸いである。また、ラトアン村のような都心から遠く離れた少数民族の村の学校にこそ、紙芝居や絵本のような楽しみながら文字を学べる環境が整うべきであると思った。

その後、時間があつたので折り紙作りを行った。折り紙はメダル、手裏剣、お花、カエル、つるなどで、子どもたちからも評判が良く、「もう一個作って!」とねだる子どももいた。完成した時の満足そうな表情が印象的であつた。

た。また、交流の時間が終わった後も、村の家に集まってみんなで折り紙を折る姿や、折った折り紙、折る前の折り紙を大切に持って帰る姿が見られた。子供達が折り紙や竹とんぼを見て、今回の交流やラオス研修を思い出してくれたら嬉しい。

こども達と豊かさ調査のワークシヨップ

永川愛佳

今回の研修では小学4年生と5年生を対象に「豊かさ」についてのワークシヨップを行った。参加してくださったのは4、5年生の12名と、高校生・大学生の5名である。ワークシヨップでは、村の大人を対象に実施するワークシヨップの豊かさ項目を参考に、村の小学生にもわかりやすいように工夫した豊か



さ項目を使用した。項目は①仕事・お金、②家族・友達、③平和、④健康、⑤将来の夢がある、⑥自分の好きなことがある・趣味、⑦勉強・学校に行ける、⑧伝統・文化、⑨平等になれる権利の9つである。これらの順位づけをしてもらった。グリーンディスカバリー（村滞在のコーディネートをしたエコツア専門のガイドさんたち）の方々、ラオス大学生のに通訳をお願いし、ワークシヨップを行った。まずはじめに、個人で豊かさの順位付けをしてもらい、そ

ワークショップの様子



佐藤由理

ワークショップ班では、豊かさ調査として、ラオ語に翻訳した豊かさ指標を使い、男女別、年代別に班に分かれ豊かさ調査を行った。豊かさ調査に個人で答え、その後班ごとの意見として多かったものを研修生と、村人達がまとめ、そのグループの指標とするというものである。年代別にまとめたものを学生が発表し、まとめを行うというのがワークショップの流れである。

班ごとに様子は違ったもののどこの班も和気あいあいとワークショップに答えていたのが印象的であった。また、ラトウアン村はカム族の村であるため、ラオ語が読めない方もいたが、読める村人が教えて助け合っている姿も印象的であった。このようにカム族とラオ族では言葉も違い、

の後グループに分かれ、話し合いをしてもらいながら豊かさの順位付けをしてもらった（2回とも同じ内容）。

個人での順位付けを行っているとき、小学生の子どもたちの中に文字が読めない子がいること、項目が難しくて分らないこと、順位付けの概念がないことなど、私たちが想像していなかったことが次々と起きてしまい、ワークショップを進めることの難しさや、ワークショップ自体が上手いかわからないのではないかと感じてしまった。それでもグリーンディスカバリーの方々、ラオス大学生の方々、学女生の皆さんが根気よく小学生の子どもたちに説明してくださっている姿を見て、私たちも諦めずにワークショップに取り組んだ。グループでの順位付けも皆さんの協力もあって何とか最後までやりきることができた。今回、高校

価値観も違うため、これを考慮して結果をまとめるということが問題に挙げられた。また他の問題として識字率の問題が挙げられる。特に二〇代の女性グループでは識字率が低く、ラオ語が読めない人もいたが、村人やグリーンディスカバリーなどの助けもあり、なんとか意見を交わすことができた。私は、年代により差が激しく出る予想をしていたが、そこまで違いのない結果となった。ワークショップの内容については第三章の研究・報告で詳細を記しているので、ご覧いただければ幸いである。

豊かさ調査の後、ワークショップ班の学生が結果のまとめをしている時間は、日本の文化の紹介として、風鈴と日本のスナック菓子（おかし、抹茶のクッキー）を紹介した。日本のお菓子は皆「セアップ！」（おいしい）と言って

生と大学生の方にもワークショップに参加してもらったのだが、こちらはグリーンディスカバリーの方々、ラオス大学生の方々の通訳のおかげで比較的順調に進めることができたと思う。ワークショップを行ってみて、最後に小学生の子どもたちに「ワークショップは難しかった？」と質問したところ、ほぼ全員の手が上がった。この反応を受けて、私は難しい内容で申し訳なかったという気持ちもあったが、それ以上に小学生の子どもたちが最後までこのワークショップに協力してくれたことが本当に嬉しかった。

ワークショップの詳しい内容は第3章にて研究・報告を行うため、そちらを参照していただければ幸いである。子ども班：永川・奥川・佐藤・堀合

笑顔で食べてくれた。風鈴に関しては、音が出る面白さに反応して、音を鳴らしているおじいちゃんが多かったが、日本人の音に涼しさを求めるような反応ではなかったため、日本文化の繊細さを発見する機会となった。その後の学生のまとめの発表に村人達は真剣に聞いてくれており、村人達にも豊かさについて新たな発見になる機会になればいいと思った。

ホームステイ報告



堀合優希

ポー（父）、メー（母）、祖母、娘三人が暮らす家でホームステイをした。

夜九時には寝て朝五時には起きる早寝早起き生活だ。鶏の餌やりから始まりご飯作りに入る。生きている家畜を絞めるところを見たときは衝撃を隠せなかったが、普段忘れかけている命のありがたみを感じることができた。家事は女の仕事だとGDから教わりそれを踏まえて観察していると料理や洗濯は家の女の人みんなが協力してやっていた。しかも嫌々という感じではなく活き活きとやっていたのが印象的だった。不慣れな私達が手伝いをした時も優しく教えてくれて、一見つらそうに見えるものにも楽しさを覚えた。他にも人の温かさをとても感じた。メーは私達もち米をあまり食べてないように見えるといった次の日から普通のご飯を出してきてくれたり、私たちの水が無いのを見て集会所からわざわざ水を持ってきてくれたりとホストファミリーの優しさに触れっぱなしだった。ポーは最後、「料理の味も悪く生活も不便でごめんね、でも来てくれてありがとう。またいつでも来てね」と言ってくれた。貴重な経験をさせてもらった上に、優しさ温かさに触れた四日間だった。

雲田理愛

二度目の研修参加であるので、昨年の体験と比較を交え報告したい。昨年との一番の違いは水嵩である。ラトウアン村では、ダム建設の影響で、大幅な水嵩上昇が起こり、昨年私達が登った入口の坂は水没していた。昨年も訪れたメンバーからは、船をつける村を間違えたのではないかと思った、という声も上がったほどである。船を降りると、村の人が花を片手に温かく迎えてくれた。集会場で待っていたホストファミリーは気さくに「サバイディー」と挨拶をして、私達を家に迎え入れてくれた。その後ホストファミリーと昼食をいただき、村を散策した。二番目の違いはソーラーパネルの増量である。ちらほらと家の屋根にはパネルが貼られ、地面にもアンテナのような道具が取り付けられていた。私のホームステイ先にもソーラーパネルが設置されており、グリーンディスカバリーを通じて、これはどうしたのか、と聞いてもらった所、農産物を売ったお金を貯めて購入したものだと言った。一方で全く変わらなかった点は、村のゆったりとした時間や、人の温かさであった。今後このラトウアン村の美点が損なわれないまま、発展していけばと思う。

バーシーの儀式& コープチャイパーティー ～お別れ・感謝の会～



バーシーの儀式とは、儀式を受ける人の健康や幸せ、安全、繁栄を願って行う儀式である。これは、出生や結婚、死別というような人生の節目に加え、歓迎や送別、厄払いなどの際にも行われる。これにより、村の人達はバーシーの儀式を私達のために行ってくれた。村生活の最後の日、ホストファミリーから借りたシンと呼ばれるスカートを着て集会所に行くと、食事の時使っていたテーブルの上にバナナの葉で作られたツリーのような物やお花、白い紐、お菓子、ご飯などが置かれていた。このテーブルを中心にして、学生や村長さんをはじめとする村の人達で囲むようにして座って儀式が始まった。長老と呼ばれる人がお経のようなものを唱えはじめ、それが終わると多くの村の人達が白い紐を手に取り、私達の手首に何かを唱えながら結んでいった。私ははじめ、何が起きているのか分からず戸惑ったが、しばらく経つと自然と涙が出てきた。言葉は通じなくとも、村の人達の優しさや暖かさが強く感じられたからだと思う。伝統的な文化であるこの儀式を経験することができて本当に良かった。また伝統を守り続ける姿勢を見て、その大切さに改めて気付かされた。

三上詩織



ホームステイ中家族は常に私達を気遣いもてなしてくれた。初めてご飯を食べた時に自己紹介をしたが、最低限しか伝えられず言葉の壁は大きいと感じた。しかし一緒にいるうちにすれ違う時には互いに微笑んだり、生活様式をジェスチャーで教わったりと段々家族として打ち解けられた気がした。ある時体調が悪く家で休んでいたら、母がとても心配そうな顔で私に寄り添い話しながら手で体温を測ってくれた。私には正確には何を言っているのか理解できなかったが、大丈夫？熱はない？と心配してくれているということははっきりわかった。母の優しさに胸がいっぱいになった。気持ちを通じれば言葉の壁など問題ないと思えた瞬間だった。最終日には父も母もたくさんの激励の言葉を述べてくれた。母は涙さえ流していた。たった数日間同じ家で過ごただけで多くを話したわけでもない、それでも私達のことを大事に思い別れを惜しんでくれる家族を見て、なんて暖かい人達だろうと感動した。不便さに戸惑うことも多かったが、それ以上にゆっくりと流れる時間や暖かい人々の中で心地よく過ごした村での生活は忘れられないとても貴重な経験になった。

梅内優花

『コープチャイ』とはラオス語で『ありがとう』という意味。村人達からバーシーの儀式をしてもらい、次は研修生の方から村人達に向けてコープチャイパーティーをした。まず、四日間お世話になったラトゥアン村の村人達へ感謝の言葉を送った。初めての環境、経験に不安ばかりだった私達は、日本では感じられない村人達の心の温かさを沢山感じながら、楽しく様々なことを学ぶことができたのは村人達のおかげであることを伝えた。村人達にとって何か残るものが良いと考え、日本の国旗に研修生一人一人が感謝の思いを寄せ書きしたものと、皆で撮った写真を入れた写真入れの色紙をプレゼントした。（その国旗はお別れをし、村から出た研修生達が乗るボートが見えなくなるまで国旗を村長さんが私達に向けて振り続けていてくれてとても嬉しかった。）その後、日本の伝統的なものを伝えられたらと思い、村の子ども達と研修生みんなでソーラン節を踊った。振りが簡単だったので子ども達もすぐに覚えてくれて、楽しそうに踊ってくれた。最後には、あらかじめ研修生みんな決めていた歌『世界に1つだけの花』を歌い、コープチャイパーティーを終えた。研修生や村人達からはたくさんの涙が見られ、本当に感動的な時間だった。ラトゥアン村の人達にとってこの四日間が私達と同じように心に残るものとなっていたらとても嬉しい。

高野杏利沙

IN ルアンパバン

ナイトマーケット

藤川恋音

ルアンパバンでの研修二日目の夜に、ナイトマーケットに出掛けた。日本で売っている商品とはちがい、手作り感があるいかにもラオスらしい洋服、雑貨、アクセサリーが驚きの安さで買えるとあってみんな大はしゃぎ。最初は遠慮気味だったものの、徐々にお店の人との駆け引きに慣れていき、できる限り安い値段で買おうとみんなでたくさんのお店を回り、値切り交渉に挑戦した。そのおかげでたくさんのお土産を日本に持ち帰ることができ、ラオスでのショッピングを存分に満喫した一日になった。



托鉢

菊池葵

まず初めに托鉢とは寺院から鉢を抱えた僧が行列を作って朝五時頃から歩き回り、食糧をもらう儀式で、特にルアンパバンの托鉢は規模が他の地域と比較しても大きく、有名な観光の一部となっている。僧は年配の方から小さい小学生ほどの年齢まで幅広く存在する。主に村人があげるものとしてバナナの皮にくるんだもち米、むぎだしのもち米、お菓子などが主である。中には現金をあげる村人もいる。村を一周し終えると世話係の僧侶達が朝食の準備をする。中には貧しい近所の子ども達も寺院に朝食をもらいに来ることもある。その後、僧侶達は朝食をとる。これがラオスで行われている托鉢の流れである。ラオス人の生活と上座部仏教との結びつきが強く、寺院が共同体としての村のシンボルになっており、村人の生活と深く関わっていると感じた。また、共同体の中で上手く社会の変革と結びつき、変化しながら伝統を受け継いでできていると考えた。



象乗り体験

原萌子

今回の研修では、毎年恒例となっている象乗り体験の時間が設けられた。二人一組になって象の背中に乗り、様々な場所を歩く体験プログラムである。普段動物園でしか見られない象を目の前にして、その大きさに怯み、最初は乗ることさえ躊躇われたが、歩いていくうちに背中の感覚にも慣れていった。ゆっくりゆっくり歩みを進める象に次第に愛着が生まれるとともに、景色を楽しむ余裕さえ生まれた。訓練されているとは言え、普段から自然の中で暮らしている施設の象はそれぞれ性格も様々で、道を逸れてしまったり道端に生えている草を食べるために立ち止まってしまったり、思うように進んでくれないことも多々あったが、それも含めてこの体験の醍醐味と言えるように感じた。約一時間通して、舗装されていない草むらや川を通過し、出発地点へ戻る。最後は象への感謝を込めてバナナをあげることも出来、美味しそうに食べる象達に、研修生の顔にも笑顔が見られた。

世界遺産

三井遙

市内全体が世界遺産になっているルアンパバンを最終日に堪能することができた。まず最初にワット・シエントーンを訪れた。敷地内は閑散としていて、外とは違い少しばかり時間の流れがゆっくりしているように感じた。訪れた日のルアンパバンは晴れだったため、太陽の光が寺院の外壁を照らし、外壁の黄金色がより一層輝いて見えた。寺院の中は色とりどりの豪華な装飾が施され、威厳のある仏像が奥に鎮座していた。丁度祈りをささげている人を見かけ、地元の人からもこの寺院が深く慕われていることが窺えた。その後、全員でプーシーの丘を登った。猛暑の中、長々と続く階段には心を折れかけた。しかし頂上に到着し、目の前に広がる景色を見た瞬間、疲れなど一気に吹き飛んだ。眼下に広がるルアンパバン市内やメコン川、ナムカーン川に圧倒され、そこから一望できるパノラマは本当に素晴らしいかった。



IN ビエンチャン



ラオス国立大学の学生と交流

並川裕璃恵

九月三日（土）は、国立ラオス大学の学生との交流会が開催された。ラオスの学生は十五歳から二十三歳までの男女六人が参加してくれた。交流はそれぞれの自己紹介から始まった。この集まりでも、村で行った豊かさについてのワークショップを行い（ワークショップについては二十九頁から三十六頁を参照）、都市部の高等教育を受けているラオス人学生にとつての豊さを考えた。ラオスの学生一人・学女生二人の三人六グループをつくり、九つの豊かさ項目の順位付けに関する考察を行った。六人の結果を一般化することができないほど、六人それぞれの豊かさに対する考え方が異なっていた（詳細の結果は三十九頁から四十一頁を参照）。しかし、どの豊かさ項目をより重要とするかについて、六名とも大変明確な理由を述べ、多様な結果は、六名の学生の出身地やバックグラウンドが異なることに起因していることがよくわかった。六人の結果について全体で意見交換が行われた。村他で行った際に聞いたのとは異なる理由が聞けたことは、豊かさは国や性別等によって必ずしも一般化できないのかもしれない、ということを感じることにもつながり、大変意義ある交流となった。また、交流を通してお互いの国がより一層身近に感じられた。

ラオスのこども

佐藤由理

ラオス研修最終日、私達はビエンチャンにある「ラオスのこども」(ALC - Action with Lao Children)の事務所を訪れた。ラオスのこどもは、ラオスで絵本や紙芝居の出版、絵本の翻訳を行い、ラオスに図書館や小学校付属の図書室を開設して、ラオスのこどもたちが絵本に触れる環境を整えるNGOである。今回事務所でお話しをしていたのは団体代表のチャントソン・インダヴォンさんである。チャントソンさんは、日本に高校生の時から留学をした故にわかるラオスの教育環境について問題視していた。先生は給料が低く自分の生活に余裕がないため、生徒と真剣に向き合えないこと。教科書を暗記させる勉強しかないこと。また、ラオスには本や絵本を読む文化・環境がないために、絵本を余計なものだと思っている人がいること。口承文化であるためにラオス語の読み物は売れないことなど、ラオスの教育が抱えている問題について興味深いお話を伺うことができた。



車いすバスケット選手との交流

古谷理恵

NPO法人「難民を助ける会」を訪問し、岡山氏から会のラオスでの活動についてお話しして頂いた。車いすがなかったラオスで車いすを製造、普及し始めたこと、障害者の自立を支援をするために、きのこやナマズ、カエル、コオロギを栽培するための訓練事業等についての説明があった。その後、やはりここでも豊かさについてのワークショップを行った。まずは個人で表を作成してもらい、男性と女性に分かれて一つの表の優先順位を決めてもらった。私は男性のグループを担当していたが、自分の意見を主張し合っており、活発な意見交換が行われていた。ワークショップの結果と考察は第三章に書かれているので、ご覧になってほしい。

ワークショップ後、車いすバスケの試合を体験した。四チームに分かれ、研修生と選手の混合で五人一チームだった。車いすバスケはテレビで見たことがあるだけだったので、イメージとしては、ぶつかって転倒するかもしれない、など恐いものであった。選手の皆さんは私達が相手であつたため、軽めの調子で接してくれたと思うが、実際に試合をしてみるととても楽しかった。もともと体を動かすことが好きなので、授業でやったバスケットボールを思い出し、汗を流しながら試合をした。車いすに座っている分、シュートを打つても中々決めることができなかった。また、パスをする場合も受ける場合も車いすがある分、振り返る動作がしづらかった。

その反面、シュートを決めることが出来た時はチーム全体に活気が出て、とても盛り上がる事ができた。途中選手同士の試合を見せてもらったが、相手選手をマークし、女性に男性にぶつかりかける様子は、とても激しく迫力があつた。確かに車いすに乗ってバスケをすることは私からすれば珍しいことであるが、見ているうちに障害を持っていいるから、車いすを使っているから、ということ忘れてしまいうほど、自分と車いすを一体化させていた。結果的に私のチームが優勝し、笑顔の写真撮ってもらった。ラオスの選手と日本の選手がいつか試合をして欲しい、と感じた。





第3章

研究・報告



自由研修

草刈世那

最終日の午後は、村のホームステイで仲良くなったラオス国立大学の学生にビエンチャンの市内を、トゥクトゥク（三輪タクシー）で案内してもらった。一カ所目は、ラオス仏教の最高の寺院で、ラオスの象徴とも言える、タート・ルアンに行った。中に入ると高さ約四十五メートルもの黄金の仏塔と、横たわるブッタがあり、その美しさと大きさはかなり見応えのあるものだった。二カ所目は、パリの凱旋門を模して作られた、パトゥーサイ（凱旋門）を訪れた。門の中へと入り、天上を見上げると宗教的な絵柄が描かれていて、まるでヨーロッパににいるかのような気分にもなった。チケットを買って、展望台に登ると、そこからはビエンチャンの景色が一望でき、とても綺麗だった。最後に、ビエンチャンで最も古い寺院であるワット・シーサケットを訪れた。それは、市内で唯一、建築当時のままの状態を保っている寺だけあり、とても神秘的であった。

ラオスの歴史を目で見て、肌で感じ、とても充実した自由研修をすることが出来た。また、国境を超えて、日本人の私達に親切に町を案内してくれたラオス国立大学の学生にも、大いに感謝したい。

村での ワークショップ

宇田川史織・梅内優花・大岩咲希乃

今年度のラオス研修では、例年と同様に研修テーマにそったワークショップを事前に研修メンバーで考え、ラオス滞在中にはワークショップが中心となって交流する様々な方を対象にワークショップを行うことができた。実施したワークショップの内容や結果については以下の通りである。

【目的】

今年度のラオス研修のテーマである「豊かさ再考 ―ラオスの農村から学ぶこと―」をもとに、普段あまり深く考えることのない「豊かさ」について考える機会をもちたいという思いからホームステイをしたラトゥアン村の大人たちをはじめとし、交流する方々を対象にワークショップを行った。このワークショップを通して「ラオスの人々が考える豊かさやそれに対する

価値観について知る」ということ、そして「私たち研修参加者が日本との比較を通して豊かさやその多様性について考えながら現地の良さを活かす国際協力の在り方を模索するきっかけになるようにする」ということを目的とした。また、私たち研修メンバーだけでなく、現地の人々にとっても意義あるワークショップにしたいという思いから、「ラオスの人々が自分たちの生活を振り返る機会を持ち、すでにある豊かさについて認識するきっかけになるようにする」ということもワークショップの目的として定めた。

【対象者】

- 学習院女子大学学生（ラオス渡航前に研修メンバーと伊藤先生の授業履修している学生）
- ラトゥアン村の十八歳以上の男女

- ラトゥアン村の小学校四・五年生の生徒（）

- グリーンディスカバリー

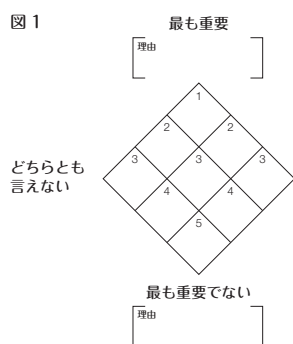
- ラオジャンセンセンター（国立ラオス大学に併設されている日本センター）の学生

- ラオスにて車いすバスケットをしている人（）・ラトゥアン村の小学生（三十七頁～三十八頁）
- 車いすバスケットの人（四十二頁～四十四頁・ラオス大学の学生（三十九頁～四十一頁）

【日本の事前準備・ワークショップ内容】

ラオス渡航前の授業で「開発とは」というテーマの元、開発に関わる項目をランキングをするワークショップを行った。ランク付けは九つの項目の中から最も重要だと思ふ項目を一つ、どちらかといえば重要だと思ふ項目を二つ、どちらとも言えない項目を三つ、どちらかといえば重要でない項目を二つ、そして最も重要でない項目を一つ選び、ダイ

アグラムに記入していくという方法（図1参照）で行った。このワークショップをもとに、「豊かさとは」というタイトルで、九つの項目の中で「豊かさ」を考える上で重要だと思う項目をランク付けするというワークショップを行うことにした。九つの項目を既存の公けのデータをもとに自分たちで作るところから始めた（九頁参照）。さらに、価値観を比較するということから、村ワークショップ班以外の車いすバスケットやこども班、またラオス大学学生との交流での活動の一部として同じワークショップを行うことになったため、九つの項目を研修メンバー全員で考えることにした。具体的な内容は九頁を参照してほしいが、公けのデータとしてはMillennium Development Goalsや内閣府経済社会総合研究所の「幸福度に関する調査」などを利用し、そのデータを参



考に「豊かさ」の指標として使えそうなものをいくつかピックアップした。そして、それらをふまえて各自で「豊かさ」に関する項目を考えてもらい、最終的にはメンバー全員で意見をまとめて項目を決定した。以下AからIが決定した九つの項目である。

- A. 仕事・お金…安定して仕事を続けることができ、食べ物を買うお金といった生活していく上で必要なお金がある。

- B. コミュニティ…自分の周りに頼れる家族や友人、地域コミュニティがある。

- C. 治安…戦争や暴動、犯罪などがなく、一人一人が安心して生活できる環境がある。
- D. 衛生環境と健康…飲み水や住むところ、身の回りなどにおいて清潔な環境が保たれていて、病気にかかりにくく毎日元気に過ごすことができる。

- E. 将来性…日々生活する中で将来の夢や目標があり、それに向かって自分の人生をどう歩んでいきたいかを自分で考え選択することができる。

- F. 余裕…自分の好きなことや熱中できる趣味があり、そのための時間や心の余裕を確保することができる。

※（）…ラトゥアン村の小学生、車いすバスケットをしている人、ラオス大学学生を対象にしたワークショップ結果は以下のページを参照。



G. 教育：教科書や教師、教室などといった教育環境が整っており、十分な教育を子供から大人までみんな平等に受けることができる。

H. 文化・伝統：自国の文化や習慣が尊重され、昔ながらの自分たちの生活や伝統が守られている。

I. 平等な社会：性別や障害の有無などによって差別されることがない社会が実現できている。

「ワークショップの流れ」

時間的な限界により、以下の二パターンでワークショップを行った。

パターン1

学習院女子大学学生・ラトゥアン村の村人を対象として行ったケース

四グループの計八グループを作った。こちらからのリクエストとしては各グループに村人が三人ずつ、つまり計二十四人を対象にする予定であったが、実際ワークショップを始めてみると人伝えでワークショップのことが広まったのか、年代によって人数は様々ではあったが、計四十六人という予定していた人数の約二倍の人が来てくれた。その八グループにグリーンディスカバリーの人、ラオジャンの学生、学女生が加わりワークショップを進めていった。また、ワークショップの間は一か所に大勢が集まり、かつ私たちにとってはホームステイ先の家族以外の村人と関わるきっかけの機会であるということから、ランク付けが終わったグループからおせんべいなどといった日本のお菓子や扇子・風鈴を持っていき、村人に紹介することで交流の場となるようにした。そしてその間にワーク

1. まずは個人で九つの項目の中から自分にとって「豊か」だと感じる順にランク付けをし、ワークシートの表に記入する。その際、最も重要だと思う項目と最も重要でないと思う項目については理由も書いてもらう。

2. 何人かのグループに分かれてもらい、個人で考えたランキングをもとにグループで話し合っ一つのランキング表を作ってもらう。この際も、最も重要だと思う項目と最も重要でないと思う項目については理由を書いてもらう。

3. 各グループで作ったランキングの結果を理由も添えて発表してもらう。

4. 全体的な傾向や気づいたことなどをワークショップ班でまとめ、「豊かさ」について改めて考える場になるようにする。

ワークショップが各グループの傾向を把握できるようにした。

【結果】

ワークショップの結果はそれぞれ以下ようになった。なお、結果の集計方法としては、各グループ、または個人が一〜五位にランク付けをしたワークシートを回収し、一位にはA〜Iの中のどの項目がより多く選択されたか、といったように、各ランクにどの項目が最も多く選択されていたかをみて決定していった。

学習院女子大学学生

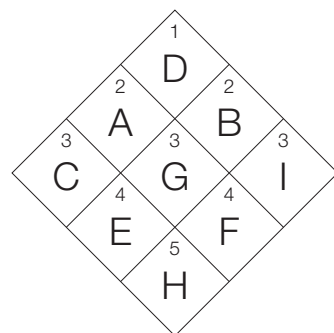
日本人の考える「豊かさ」の参考にし、私たち自身が自分にとっての「豊かさ」とは何かを考えるきっかけにするため、研修メンバー十五人と伊藤先生の「国際開発論 授業履修生徒十三人の計二十八人を対象とした。以下が学女生の結果である。

パターン2

グリーンディスカバリー・ラオジャンの学生グリーンディスカバリーとラオジャンの学生対象のワークショップでは、上記1のみを行った。また、村人対象のワークショップで通訳をお願いする予定であったグリーンディスカバリーとラオジャンの学生に事前に同じ内容のワークショップを行うことで、当日円滑に進めることができるよう工夫した。

「ラトゥアン村での実施」

村人対象のワークショップでは女性が男性の意見に左右されないよう男女別でグループを作り、さらに年代によって結果が異なる可能性がある予測したため、男性の二十代、三十代、四十代、五十代以上という四グループと、女性の二十代、三十代、四十代、五十代以上という



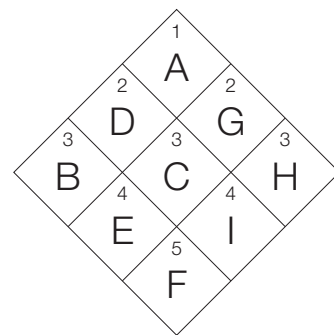
「豊かさ」を考える上で最も重要だと思う項目として『D：衛生環境と健康』が挙げられ、理由としては健康があつてその他の物事を行うことができるから、などといった意見が多くあった。一方で最も重要でないと思う項目として『H：文化・伝統』が挙げられ、理由としては伝統や文化は変化するものであり、あまり縛られすぎると発展できないと思うから、普段生活していて伝統や文化をあまり意識していないから、などといった意見が多くあった。特に『H：文化・伝統』に関しては、ほとんどのグループが最も



重要でない項目として選択しており、学女生、もしくは日本人にとって、「豊かさ」を考えるときにあまり重要視されないという傾向が読み取れる。

ラオジャパンの学生

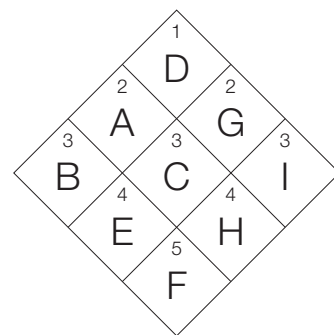
ラオジャパンの学生は全員女性で年齢も学女生と近く、さらに大学に通っているという点で環境が似ている中で「豊かさ」についての考え方について私たちと差があるのかについて知るため、ラオジャパンの学生六人を対象にした。以下がラオジャパンの学生の結果である。



「豊かさ」を考える上で最も重要だと思う項目として『A：仕事・お金』が挙げられ、理由としてはお金や良い仕事があれば安定した生活が送れるし、教育にもアクセスできるから、お金は他の何かをする際のツールであるから、などといった意見が多くあった。また、どちらかといえば重要である項目として『D：衛生環境と健康』と『G：教育』が挙げられていることが特徴的で、『G：教育』に関しては、教育は全ての人が受けられるようにするべきであるという意見がみられた。一方で最も重要でないと思う項目として『F：余裕』が挙げられ、理由として余裕はできてからはじめて考えることであり、優先されることではないから、余裕があればそれ以外の瞬間であっても良いことはあるから、などといった意見があった。

グリーンディスカバリー

グリーンディスカバリーの人はほとんどが大学などを卒業しており、また仕事を通して英語も身につけているといったバックグラウンドを持つが、そのグリーンディスカバリーの人とおそらく全く環境が異なるであろう村人の間では「豊かさ」を考えるときに差がみられるのかどうかを知るためにグリーンディスカバリーの六人と日本語を話せるラオス人ガイド一人を対象にした。以下がグリーンディスカバリーの人の結果である。

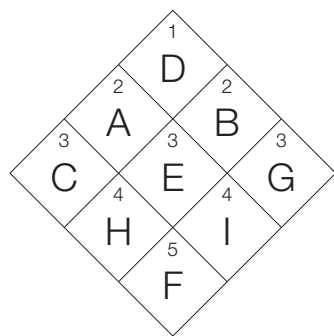


と比べたらそこまで重要でないから、などといった意見が多く挙がっていた。

【結果の比較と考察】

まず学女生と村人の結果を比較してみると、意外なことに似たような結果が出た。両者とも「豊かさ」を考える上で重要な項目として『A：仕事・お金』『B：コミュニティ』『D：衛生環境と健康』という三つを挙げていたのだ。また、理由に関しても学女生と村人では三項目ともほとんど同じ意見が出ていた。学女生と村人では置かれている環境がかなり異なっているにもかかわらず、同じ理由で同じ項目を「豊かさ」を考える上で重要だと感じているということは大変興味深い。その一方で最も重要でない項目に関しては学女生のほぼ全グループが『H：文化・伝統』だと答えたのに対し、村人のほぼ全グループが『F：余裕』を挙げていた。理由としては学女生やグリーンディスカバリーの人の同様、健康でない又何もできないから、という意見が多かった。一方で最も重要でないと思う項目として『F：余裕』が挙げられ、理由としては余裕のある時間は他

もこのワークショップを通して既に自分たちが持っている「豊かさ」を認識してもらう機会にするために十八歳以上の村人計四十六人を対象にした。以下が村人の結果である。



「豊かさ」を考える上で最も重要だと思う項目として『D：衛生環境と健康』が挙げられ、理由としては学女生やグリーンディスカバリーの人の同様、健康でない又何もできないから、という意見が多かった。一方で最も重要でないと思う項目として『F：余裕』が挙げられ、理由としてはラオジャパンの学生と同様、自由な時間は他と比べるとそこまで重要でないから、といった意見が挙げられた。

ラトゥアン村の十八歳以上の男女

ラトゥアン村の人々が何を「豊かさ」と考えているのかについて知るため、また村人自身



プは『F：余裕』だと答えており、差がみられた。『F：余裕』を最も重要でない項目として挙げていたのはラオジャンの学生やグリーンディスカバリーの人にも共通してみられる傾向であり、ラオスの特徴であると思われる。また、学女生が最も重要でない項目として挙げた『H：文化・伝統』は村人の結果では四位のあまり重要でない項目として選択されており、「豊かさ」を考える際に村人は学女生より『H：文化・伝統』を重視しているということがこの結果からわかる。ワークショップを行う前はラオスでは『H：文化・伝統』が守られているというイメージがあり、このワークショップでは上位にランクインするのではないかと予想していたが、意外と四位のあまり重要でない項目として選択されていることに驚いた。おそらく、この要因と

して、村人は『H：文化・伝統』をもちろん大切だと考えてはいるが、他の項目と比較することで順位が下がったということが考えられる。しかし、村人が学女生よりも『H：文化・伝統』を重視しているということは事実であり、これは私たちが村でのホームステイ生活の中で気づいたことだが、村ではモノが少ない中で、料理や家畜の世話などといった伝統や言い伝えがおばあちゃんからお母さん、お母さんから子供へといったように受け継がれているのではないかと感じる場面が多々あった。このことから、村では『文化・伝統』が日々を過ごす中で浸透しているのに対し、私たちの日本では『文化・伝統』は生活している中であまり意識されない傾向があるのではないかと考えられる。さらに、村人やラオジャンの学生、グリーンディスカバリー

の人は『F：余裕』を最も重要でない項目として挙げていたが、ラオスでの生活は、私たちが普段日本で過ごす時よりもゆっくりと時間が過ぎていくような感覚を覚えた。このことから、ラオスでは『余裕』を既に持っているからこそ重要視しておらず、反対に日本では常に時間に追われていて『余裕』が欲しいと感じているからこそ村人よりは重要視しているのではないかと思われる。これらの考察から、日本とラオスでは時間の過ごし方や感覚に違いがみられ、村では日本にはないような伝統などを大切にしながらゆったりと過ごす時間があり、それが村人の「豊かさ」につながっているのではないかという結論でまとまった。

『ワークショップを通して』

今回のワークショップは学習院女子大学生とラオスの

人々が考える「豊かさ」について、どのような違い、もしくは共通点があるのかということを知る非常に貴重な機会となった。ワークショップの結果の中でも特に学女生とラオスの人々にみられた「違い」である「余裕」の優先度の低さ、あるいは想像していたより優先度が低かった「文化・伝統」の位置づけは大変興味深い。ここから推察できるのは、ラオス人には伝統・文化や余裕が生活の中に自然とある、ということではないか。充足されているからこそ、それを意識しない、欲しないからその優先度が低くなっているのかもしれない。そして、その生活を目の当たりにする私たちにとっては、それこそがラオスの「豊かさ」に感じるのではないか。このワークショップを行ってみて、それぞれ「豊かさ」に対する考え方は多様でどのような「豊かさ」が一

番良い、悪いということはないのではないかということも同時に確認できたように思う。そのことを踏まえつつ、各自が自分の結果と比較し、ラオスにはあるが自分たちにはない「豊かさ」を発見することで改めて現地の人々が既に持っている「豊かさ」を生かした国際協力、開発とはどのようなものなのかを考える機会になっていれば良いと思う。ワークショップ班：宇田川・梅内・大岩・三上

子どもとの交流班

奥川優里奈・堀合優希



子ども班では村の小学四、五年生を対象に、「豊かさ」を考える上で何が重要視されるのかを調査するワークショップを行った。大学生や大人を対象としたワークショップでは、「仕事・お金、コミュニティ、治安、衛生環境と健康、将来性、余裕、教育、文化・伝統、平等な社会」の九つの項目を使用したのが、今回のこども班でのワークショップでは、小学生でもわかりやすく理解してもらえよう、項目を簡単なものに変更した。それが、「仕事・お金、家族・友達、平和、健康、将来の夢があること、趣味、勉強・学校、伝統・文化、平等になれる権利」である。

ワークショップの結果をまとめたところ、最も重要視されている項目となったのは、「教育」であった。そして「健康」「仕事・お金」「伝統・文化」「将来の夢があること」「家族・

友達」「平和」「趣味」の順に続き、最後に「平等になれる権利」となった。

このようにランク付けされたものの中で、最上位の「教育」と最下位の「平等になれる権利」となったそれぞれの理由には、前者は学校に行ってレベルの教育を受けることでいい職につけられるから、後者はそもそも子供たちに平等という概念があまりなかった、というものが挙げられた。

今回のワークショップの活動で望んでいたものは、それぞれで順位付けをした後に、皆で話し合いをしグループワークをする流れであった。しかし、ラオ語が読めないカム族の子供がいた点、順位付けができない子供がいた点などから、このようにまとめた結果が、子供が理解をし、自分で判断、納得した結果ではないという結論に達したため、今回のこども班のワーク

ショップでは正しい結果がでなかったという結論に至った。

この原因として考えられるものは、民族の違いによる言葉の違い、識字率の低さ、そもそも順位づけをする概念がない、という理由があがった。まず大きな壁は民族による言葉の違いについてである。ラターン村にはラオ族とカム族二つの民族の人たちがいた。今回はすべての指示をラオ語で書いていたこともあり、カム族の人には上手く説明が伝わらなかったり、GDでさえカムの言葉が分からないと苦戦していたほどであった。しかし授業はラオ語で行っているのにも関わらず、何故うまくラオ語のみでスムーズにコミュニケーションが取れなかったのかということを考えたとき、識字率の低さが窺えた。今回のワークショップに参加してくれた小学生の中には、ラオ族であっても文字が

読めない子もいた。ラオスではまだ教科書の普及が十分にされておらず、未開発の地域では持っていないのが当たり前といっても過言ではなかった。小学校に通っていたとしても日本と同じような教育を受けられるわけではないという現実を知った。

また、ラターン村の小学校では、テストなど順位のつくものを行わないため、そもそも子どもたちに順位をつける概念がないことも分かった。それにより、九つある項目を一〜五位まで順位をつけること自体が難しいことであったといえる。大事なものの、必要だと思うものはどれも同じくらい大事であり、必要だという考え方であった。

私たちは、今まで自分たちが受けてきた日本の教育を基準に考えてしまっていたために、今回のような想定外の問題にぶつかってしまった。結

果的に豊かさ調査の結果は出すことができなかったが、このように、出せなかった理由から学んだことは沢山あった。教育を受けるにあたり、教科書は一人一冊持っていることが当たり前だと思っていたが、そうでない現状を目の当たりにしたことで、教育制度が整っていないことから国や地域によってこんなにも差が生まれるのかということを痛感した。

今回のワークショップから、子供達は教育を望んでいるのに対して、識字率の低さ、テストが行われていない現状、教科書の普及率の低さなど、多数の問題を抱えていることがわかった。子供達が学校に通えることだけが教育の充実ではなく、またスタートラインに立っているだけである現状が伺えた。

子ども班：永川・奥川・佐藤・堀合

ラオス国立大学生 ワークショップ

三上詩織

ビエンチャンに来てホテルで一泊した次の日の午前中に、そのホテルの会議室で交流が行われた。会議室に入ると、男女合わせて六人の学生が、緊張した様子で座っていた。全員が揃った後、ラオスの学生一人に対して二人ずつ研修参加者がつく形で六つのグループを作った。私達ワークショップ班があいさつをして、順番に全員が自己紹介をした。学生達の緊張が少し解けたような気がした。

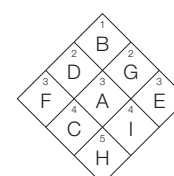
ワークショップ

その後、村で行ったワークショップと同じように説明をし、さっそくグループごとに学生をフォローしながら、ラオスの学生個人の豊かさランキングを作ってもらった。それぞれのグループには、ランキングを書く表とラオス語で書かれた項目の紙を配っている。村で行ったときは、項目

の文字が読めなかったり、そもそもこのワークショップの意味が分からないという人が見受けられたが、ここではそのような問題はなく、それぞれ悩みながらもスムーズに進められていた。全グループが終わったことを確認した後、それぞれのグループの前に出てきてもらい、発表してもらった。発表は、まずラオスの学生が自分の名前、年齢、出身地、今住んでいる所を日本語で言い、研修参加者がランキングの結果とその結果になった理由を日本語で言い、最後にラオスの学生が自分の言葉でその結果になった理由をラオス語で言うという流れで行った。

ワークショップの結果と考察

一、十五歳、女、神戸出身（七年間生活）、大学付近在住
一番にB（コミュニティ）を選んだ理由として、チームワークが大切であり、



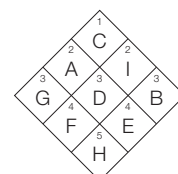
コミュニティがしっかりとしていれば成功することができると言っていた。最後がH（文化・伝統）になった理由として、昔は大切であったが、今は伝統・文化を気にしている人は少ないと言っていた。日本で七年間生活していたということもあり、日本で出た結果と似ていると考えられる。

二、十九歳、女、ビエンチャン

付近出身、大学付近在住

一番にE（将来性）を選んだ理由として、目標があればそれに向かって頑張ることができ、困難も乗り越えられると言っていた。最後がA（仕事・お金）になった理由とし

を中心にしている

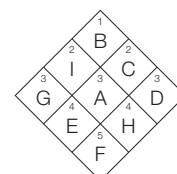


ことが分かった。

四、二十二歳、男、ビエンチャン

出身、ビエンチャン在住

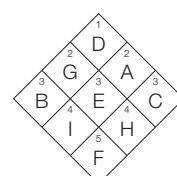
一番にB（コミュニティ）を選んだ理由として、人との関わりは重要であり、二番目のI（平等な世界）やC（治安）はコミュニティがあってできるものと言っていた。最後がF（余裕）になった理由として、上位のものと比べれば、大切ではあるが、それほど重要ではないと言っていた。これは、生まれてからずっと同じ環境で育ってきたからこそその結果であると考えられる。



五、二十歳、男、ボリカムサイ

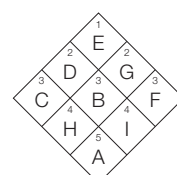
出身、大学付近在住

一番にD（衛生環境・健康）を選んだ理由として、小さいころ身体が弱く、健康であれば何でもできると言っていた。最後がF（余裕）になった理由として、暇は一人で過ごす時間であり、人は皆で生きていくから、社会の輪に入って生活すべきと言っていた。自分の経験から具体的に考えていることが分かる。Fは最後になる傾向は村でも見られたが、理由は大きく違っていた。



六、二十二歳、女、サワンナ
ケート出身、ビエンチャン在住

て、お金は人間が便利に生きるためにあるだけであり、労働力や知識があれば生活できると言っていた。今までの傾向として、Aは上位にあったので、この結果になったのは驚きだった。



三、二十三歳、女、ビエンチャン
付近出身、ビエンチャン付近在住

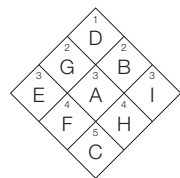
一番にC（治安）を選んだ理由として、戦争があったら普段の生活ができなくなると言っていた。最後がH（文化・伝統）になった理由として、それを守り過ぎて戦争などが起こってしまうのは良くないと言っていた。この結果から、戦争や争い事

車いすバスケット

菊池葵・雲田理愛・高野杏利沙・並川裕璃恵



一番にD（衛生環境・健康）を選んだ理由として、健康であることが前提であり、それにより仕事や様々なことができると言っていた。最後がC（治安）になった理由として、現在戦争がなく平和であり、自分で想像ができないと言っていた。やはりこの結果も、健康であれば何でもできるという考えで、五と似ていることが分かる。村でもこの傾向は多く見られた。



今回六人に豊かさについて考えてもらい、ラオスの学生の考えとして傾向をまとめようとしていたが、思っていたよりも六人がバラバラの考えを持っており、まとめるのは

難しかった。私は村での生活を通して、豊かさについての考え方が少し変わった。今まで過ごしてきた生活とは違った生活を経験することで考え方が変わったように、身の周りの環境が豊かさについての考えに大きく影響すると考えられる。また、村で一緒にホームステイしたラオジャパンの学生の結果と比べてみると、同じ学生ということからなのか、G（教育）が比較的上位に選んでいる人が多いことがわかった。F（余裕）が比較的下位になる点でも似ている。しかし、一人一人違ったバックグラウンドがあり、それにより豊かさについての考えも違う。日本人の学生と似た考えのラオスの学生もいれば、全く違った考えのラオスの老人もいる。日本に住んでいるから、一方的にラオスに対して貧しいというイメージを抱いていたが、実際にラ

オスへ行って過ごしていく中で、日本のような生活とは違っていても豊かだと感じる瞬間がたくさんあることを知ることができた。学生との交流ワークショップが終わった後、全員で机を囲んで交流を楽しんだ。机には、日本から持ってきた抹茶のお菓子やせんべい、梅のお菓子も置いて、少しの時間ではあったが、それぞれが交流を楽しんだ。お互いに質問をしたりして、充実した時間になった。ラオスの学生へのお土産には、扇子や風鈴、千代紙、せんべいを用意して、最後に渡した。最後には全員打ち解けた様子で、交流は終わった。

ワークショップ班：宇田川・梅内・大岩・三上

私達は車椅子バスケット

ボールが、人々の人生にどのような影響を及ぼし、また車椅子バスケットボールを通じて人々の人生がどのように豊かになったのか、日本とラオスを比較し検証する事を目的に活動を行った。その目的のために日本とラオスで活動をした。日本では事前準備として、E-IMPROVEという車椅子バスケット団体を訪問し、練習を見学させてもらうと同時に、アンケート調査を行った。調査項目は①車椅子バスケットを始めたきっかけ②車椅子バスケットを始める前と後でどのような変化があったか③あなたにとって車椅子バスケットとはどのような存在か④自分の人生を豊かにするために何が重要と考えるか、という4項目である。ラオスでは村ワークショップ班との連携のもと75分間のワークショップを行った。また日本で行ったものと

同様のアンケートを行った。

さて、ここで日本の車椅子バスケットについて言及したい。日本の車椅子バスケットは競技人口が少なくと言われているが、それでも日本車椅子バスケットボール連盟には関東だけで15チームが登録をしており、全国規模の大会も年に2回行われている。今回協力をしてくださったE-IMPROVEも、連盟に所属するチームの1つである。社会人の男性メンバーからなるチームで日ごろは週に2〜3回、神奈川県の実甲石田を拠点に活動している。体育館付近に病院がある事からか、入院していた際に紹介で車椅子バスケットを始めたという人が多かった。また始めた事により前向きになった、友達が増えた、と感じている人が多く、メンバーびとって人と自分と繋ぐものであったり、目標があったりするようだ。

ラオスで行ったWSの対象者は20〜40代の10人の車いすバスケットの選手である。研修のテーマである「豊かさ」を考える上で重要だと思う九項目をランキングしてもらった。WSのゴールは、車いすバスケットによって人々がどのように豊かになったのかを学生・ラオアン村の結果とラオスで比較し、検証すること。また、ラオスの人々が似た立場にある人々が考える豊かさについて知ると同時に彼らが既に持っている豊かさについて認識してもらうことであった。男性がグループ内に含まれると女性が見えなくなり積極的に言えない可能性があるため、女性4人のグループと男性6人のグループに分かれてもらった。WSの項目は村WSと全く同じ内容なのでそちらを参照して欲しい（29ページ参照）。

WSはまず各個人で答えを



試合



ワークショップの様子

考えてもらいランキングと理由を記入してもらった後で、女性と男性の2グループで模造紙のランキングを埋めてもらった。WSでの気付きについて以下にまとめる。男性も女性も項目Dの衛生環境と健康、Gの教育が上位にきている。理由は、「最低限の生活を送るために必要なお金を得るには、健康でいることや十分な教育を受け、しっかりとした仕事に就くことが必要であるから。」と彼らは述べていた。他の特徴として、学女・村の結果では下位にきていた項目「平等な社会が、女性では2番目・男性でも3番目と比較的上位にきていた。理由は、学女や村の人々とは異なるバックグラウンドを持ち、日本のようにバリアフリー化が進んでいないラオスでは日常生活で不便に感じるものが多くあまり平等ではないと感じているからであると

考えることができる。今回、ワークショップの他に加えてアンケートも行った。また、アンケートでも日本とラオスで比較をしてみることにした。アンケートに答えてくださった方々の平均年齢が、日本では36歳、ラオスでは34歳で、年齢層はほぼ同じ。4つの質問を用意し、答えていただいた。一つ目、車いすバスケットを始めたきっかけは何か。という質問に対して日本では、入院をきっかけに今のチームメンバーに誘われた、小学校の頃からバスケットをして車いすになってもバスケットができることを知り始めた、先輩の試合を見に行ったら、先輩の試合を見に行ったら、一方ラオスでは、スポーツが好き、運動することが好き、元々バスケットが好き、リハビリをしているときに友達に誘われた、などと、日本もラオスも始めたきっかけという

点では、ほとんど似ていた。2つ目、車いすバスケットを始める前と後ではどのような変化があったか、という質問では、日本でもラオスでも一番多かった回答が、友人がたっさんできた、体が健康になった、自分に自信を持てるようになった、自分が出かける機会が増え、生活・行動範囲が広がって色々なところに出かけられるようになったなどと、ここでは同じ前向きな回答が多くあがられ、どちらの国も車いすバスケットを始めて様々な変化があったことが言える。3つ目あなたにとって車いすバスケットとは一言で表すと何か。日本では、車いす人生を変えてくれた、体力づくり、青春、本気という回答に対して、ラオスでは、健康・元気でいることができる、人生を楽しめる場所、仲間ができる場などがあげられた。ここでも、日本とラオスでは、車いすバスケットの存在と

いうのは非常に生活の質を向上させているものであるということがわかった。4つ目自分の人生を豊かにするために何が必要か、という最後の質問では、日本は、人とのつながりというコミュニティを重要とするのに対して、ラオスでは健康でいること、仕事がありお金が手に入ること、という日本とは重要とするものが異なった。このアンケートを通して、車いすバスケットに関する質問では、日本とラオスではあまり回答の差はなかったが、豊かさに必要なものは日本とラオスでは異なることがわかり、WSでは発見できなかった考察をすることができた。

今回車いすバスケットは車いすバスケットが人々の人生にどのように影響を及ぼし、また車いすバスケットがどのように人々の人生を豊かにしたのか日本とラオスを比較し検証する

ことを目指した。また、その人自身の人生の幸福度を上げるために必要なものは何かをワークショップを通して検証するということを目指した。現地で行った結果、もっとも驚いたことはワークショップで結果がラオスも日本もほとんど変わらなかったということである。私たちは現地調査を行う前、ラオスと日本は文化的背景も社会的背景も異なるため豊かさについてのWSについてもアンケート調査も共に大幅に異なると予想していた。文化的・社会的背景は人々の価値観に影響すると考えたからである。しかし、実際には上記のWS結果からわかるように日本とラオスでは結果がほぼ同じであった。では、なぜ同じ結果になったのか。今回車いすバスケットをしている方は比較的裕福な方

が多かった。そのため、日本と状況が似ており、生きていくために必要なお金を稼ぐために仕事をする必要があり、健康ということが最低限必要であるという考えを持っていた。かつ、健康でお金を稼ぐことができるかと教育費用なども捻出することができ、結果的に全体的な豊かさにつながるといえる。という考え方を持っていたから、と考えることができる。豊かさを考える上で上位にくるものは社会的・文化的背景や障害の有無などはあまり関係ないと結論づけることができる。と考える。車いすバスケット：菊池・雲田・高野・並川

開発教育(KK)班

鈴木のぞみ・永井詩織・原萌子・藤川恋音・三井遥



開発教育班は、毎年ラオスでの経験や学びをもとに、帰国後都内近隣の中学校、高校に依頼をし、開発教育プログラムと題して、授業をさせていただく活動を行っている。今年は「豊かさ再考〜ラオスの農村から学ぶこと〜」という研修テーマに則り、豊かさとは何であるのかを、日本の生徒の皆さまに考えてもらう機会とすることを目的とした授業作りに取り組んでいく。その他にも、ラオスという国や開発途上国がどのような国であるのかを理解してもらうためのワークシヨップや、クイズなども授業の中に取り入れていく。ラオスでの貴重な体験や現地で各々が感じたこと、事前学習で学んだことを

より多くの方々にも伝えたいという思いから、私たち開発教育班は平成17年度以来、この開発教育プログラムを実施してきている。毎年学生自身で近隣の中学校、高校にアポイントを取り、授業実施の依頼を行っている。中には数年前から継続して授業をさせていただいている学校もあり、授業内容は年度によって様々である。

昨年度はラオスと日本の豊かさを物質的側面と精神的側面を比較し、幸せの在り方や多様性に着目した授業を行った。生徒の皆さまに幸せとは何であるのかを改めて振り返ってもらう良い機会になった。いずれもークラス30〜40名ほどで、授業時間は60分

10分と差はあるが、卒に応じた、また学年のレベルに応じた授業づくりに取り組んだ。昨年度の実施校は以下の通りである。

- ・志木市立志木第二中学校
- ・明治学院東村山中学校
- ・川越市立霞が関西中学校
- ・町田市立真光寺中学校
- ・星野高等学校
- ・板橋区立赤塚第二中学校

今年の授業では、ラオスの農村生活と、私たちが暮らす日本（先進国）の生活を比較し、私たちの普段の生活とはだいぶ違う環境で暮らすラオスの人々の生活や考え方を紹介しながら、現代の日本社会の豊かさについて考えていくことを目的とする。例えば、私たちが滞在したラトゥ

アン村では、シャワーがない上お湯も出ないため、毎日冷たい山水を浴びることがごく普通となっている。他にも舗装されていない不安定な道や、エアコンやガスコンロもない環境の中で、人々はごく普通に生活を営んでいる。私たち日本人（先進国）は、普段当たり前のようにお湯の出るシャワーを浴び、火やインターネットなどを使用しているが、生活していく中でそれらの環境に有り難みを感じることはあるだろうか。いつも当たり前のように身の回りがあるが、私たちの周りは豊かな環境で溢れている。現代において、自分たちがいかに恵まれた環境で暮らし、豊かさを享受しているかを振り返る

ことは普段あまりないのではないか。そのような思いから今一度、日本の豊かさ、また普段意識していないだけで多くの恵まれた環境と密接に暮らしているということを振り返るきっかけとなることを願い、授業の実施に取り組んでいく。

私たち開発教育班は、本研修の目的でもある文献だけでは知り得ない開発途上国の現状に触れることである。発展途上国と聞くと、貧困や出稼ぎ労働者など負の側面のイメージが強いが、日本人に欠けている家族を大切にすることや、家族ではないが周りの人々（ラオスでは主に村の人々）を家族同様に愛して大切にしていることなどラオス

は人との関わりがとても強い国であり、それがラオスの豊かさであると感じた。2年前にもラオス国際協力研修に参加させて頂き、その時もラオスのライフスタイルを体験するため3日間ラオスの村で生活を行った。ラオス人からすれば、私たち日本人は気づけずの外国人である。そんな私たちがいきなり来て、家族の一員として生活を共にする。日本であれば考えられないことをさせて頂いた。彼ら（ラオス人）は私たちを最初から家族と同等に接してくれた。たった3日間生活を共にしたただけなのに最終日には涙を流して別れを惜しんでくれた。また、私たちが無事に日本へ帰り、今後も無事に生



活を送れるよう儀式をしてくれた。そのようなラオス人の温かさ優しさ、そして支え合っている姿はラオスの豊かさそのものだと感じた。また、私たち日本人はそんなラオスの豊かさを学ぶ必要がある。なぜならば、日本人の人の関わりがとても薄くなっているからだ。近年では、近所トラブルやいじめによる自殺、血のつながった家族でさえ殺してしまうなど悲しいニュースが頻繁にあるからだ。そんな私たちの欠けている人との繋がりを改善するためにラオスの豊かさから学ぶことが多々あると感じた。そのため、私たち開発教育班はラオス人から家族を大切にすること、また誰かのために

思いやる気持ちなどを伝え、より良い日本になるきっかけ作りを提供し、さらに発展途上国であるラオスを知ること、国際協力への関心を促すため豊かさを題材に調査を進めた。

では実際にどのように授業を進行していくのかを説明していく。まずラオスの基本情報について簡単に紹介する。その際、気候・地形といった自然環境とラオス人の生活スタイルのつながりを理解してもらうことを重視する。また、宗教や古くからの習慣が人々の暮らしに溶け込んでいる様子を伝える。続いて、ラトウアン村の基本情報について紹介した後、日本での生活とはかけ離れた、村での生活の中

で言語も通じない私たちが感動したモノや幸せを感じたモノは何か、村での生活の様子が分かる写真やエピソードから想像してもらい、「幸福感」や「豊かさ」について考える「アクティビティー」を行う。次に、現地で行ったワークショップの活動「アクティビティー2」に移る。まず、ワークショップ班が村で行った「自分にとって豊かさとは何か」に関するアンケートを行い、自分たちが考える「豊かさ」や「幸福感」をより具体的にイメージしてもらう。そのアンケート結果をもとに日本人が考える「豊かさ」とラオス人が考える「豊かさ」の違いや、そのような違いが生まれる背景などを考察するこ

とで、より広い視野で「豊かさ」や「幸福感」の在り方を捉えることを目指す。

今回、開発教育を行うにあたって、ワークショップ班が現地で実施したアンケートを参考に授業を進めていくことを検討している。アンケートとは、「自分にとっての豊かさとは何か」ということをテーマにしたものであり、現地の人々を対象に実施された。現地でのアンケート結果を授業に活かすために、ラオスで行ったものと同様のアンケートを、実際に授業に参加する日本の学生にも行う。そしてそのアンケート結果の考察や、その結果が出た背景を推測して、自分達の豊かさに対する答えを出してもらおう

と思う。さらにその答えから、ラオス人の考える豊かさとは日本人の考える豊かさを比較して、共通点や相違点を探し出してもらう。最終的に「豊かさとは何か」という疑問に対して、学生なりの豊かさの在り方や、豊かさそのものについて答えを出してもらう。このアンケートを扱うことが授業の主軸になってくるが、

研修を通して課題も見えており、授業に向けて改善をしなければならないと考えている。ラオスでこのアンケートを行った際、村の人（特に子供）が答えを出すことに苦戦していた。その理由に、項目の意味が分からないことや、順位をつけたいことなどが挙げられた。識字に関しては

日本の学生への心配は全くないが、項目の内容に苦戦する可能性は大いにある。学生たちが苦戦しないためにも、なぜ豊かさを考える上でこのような項目が挙がったのか、など項目の詳しい説明を行うことが必要だと考えられる。我々がサポートをすることで学生が答えを導き出せるようにしていきたい。

開発教育班：鈴木・永井・原・藤川・三井

個人感想

ラオス研修の九日間是非常に濃かった。特にラトウアン村でのホームステイは印象的だった。三泊四日しか滞在していないが、日本の生活がいかに便利であるか又ラトウアン村には日本のような生活環境が整っているわけではないが日本にはない時間の使い方、人々同士の関わり方が存在していた。私は今まで「豊かさ」とは日本のように物資に困らず、資金があり仕事があることと一つに決めていたが、今回のホームステイを通して「豊かさ」とは一概に決めつけることはできないと痛感した。生活環境が整っていないからこそ、村人同士が協力し知恵を使うことで日本とは異なる「豊かさ」を現地で体験でき大変貴重な体験ができ良かった。

宇田川史織

ラオス研修は私にとつては全てが初めての体験でとても有意義なものだった。目的が「豊かさ再考」ということで私は、ラオスの人々の暖かさや守られている文化の良さを実感するのだろうと予想していた。実際、村でのホームステイを通してゆっくりと流れる時間や優しい家族、純粋な子供からラオスのいいところにたくさん気がついた。一方で父母の話から、都市のように発展したいという意思があるということもわかった。電気がないのはとても不便で改善したいがお金も術もないのだと。私はこの研修でラオスの現状を良くも悪くも知ることができた。この経験をきっかけに、ラオスが良さを生かしながら発展していくための方法を考えてみたいと思った。

梅内優花

研修の中で一番印象に残っているのは村でのホームステイだ。村に到着すると村長さん、ホストファミリーの皆さんが村での生活は不便なことが多いかもしれないとおっしゃった。私も渡航前は村の生活に不便だと感じてしまうのは仕方がないと思っていたが、村での生活は思っていたほど不便だとは感じなかった。初日は食事やトイレ、水浴びなど戸惑うことも多少はあったが、私達のためにホストファミリーの方達がいろいろな準備をしてくれていたのだと思うと嬉しかった。村全体で私達を歓迎してくれて、受け入れてくれたラトウアン村の方達は、人として豊かなものをたくさん持っていると感じた。ラオス研修に参加できて本当によかった。

永川愛佳

報告会

古谷理恵

ラオス研修後の活動の一つに、和祭（学習院女子大学の文化祭）で報告会を行う。今年度のラオス研修のテーマである「豊かさ再考〜ラオスの農村から学ぶこと〜」を基に発表・展示をし、来て下さった方々にテーマをじっくり考えてもらう機会となるように作り上げていく予定である。また、この報告会後に個人から周囲の人へと考えを共有する、などのアクションを起こしてもらえるように企画していきたいと考えている。今年度はワークショップ班がまとめた九つの項目を基に、現地では様々な年齢や出身の人に

古谷理恵

調査をした。そこで報告会においてワークシヨップを実施し、自分にとっての豊かさとは何なのかを考え、ラオスでの調査結果と比較したい。ワークシヨップは参加型であるため、ぜひ多くの方にご来場して頂き、発表者と参加者、参加者同士の対話を作り出していきたい。特に学習院女子大学に興味を持っている高校生にも参加してもらい、入学したらラオス研修にも行ってみたいと感じて欲しい。また、ラオス物品を販売し、その収益を現地で訪れた車いすバスケット選手への寄付とさせて頂く予定だ。

ラオス研修では先述したテーマ「豊かさ再考」ラオス

の農村から学ぶこと」が与えられているが、研修生はそれぞれに何を見たいか、聞きたいか、知りたいかを考えて現地に行く。それは個人のものでもあるし、班の活動の一環としてでもある。ワークシヨップの結果は目で見て分かるものであるが、個々の抱いた感情や考えは振り返りの時間で意見交換をして理解出来た。ラオスについての基本的な情報やワークシヨップの結果、研修の様子に加えて、研修生が感じたことも伝えられたらと思う。楽しめる報告会となるよう、しっかりと準備をしていきたい。



大岩咲希乃

今年度のラオス研修は昨年に引き続き二回目であったが、一年を経て変わっていたことも変わっていないこともあったと感じた。昨年も訪れたラトウアン村では、村周辺のダムの影響で生活環境は変わってしまったが、人々の温かさや子供達の純粋さというの是一年前と変わらず、特に昨年のホストファミリーが私のことを見た瞬間に笑顔で歓迎してくれた時は本当に嬉しかった。不便であっても皆で協力しあう生活は私にとって心地よく感じたが、一方で村人からはもっと便利な生活を送りたいといった声が聞かれ、そう感じたのは外部からの立場で生活をしていたからかもしれないと気づかされた。改めて開発や豊かさとは何かを考えさせられる研修であった。

奥川優里奈

私は、当初参加予定であったラオス研修を見送ることになり、現地での活動は行わなかった。理由としては、近頃の不安定な世界情勢への不安によるもので、両親との話し合いの結果、1か月前に不参加することに決まった。今まで共に活動してきたメンバーや、現地でワークショップを行うグループメンバーなどに迷惑をかけてしまうことが大変心苦しかったが、これまで学んできたことが無駄にならないよう、研修後の活動により一層力を入れたいと考えた。そして是非とも、来年の研修には参加したいと考えている。また、研修中にメンバーから送られてくる写真はどれも魅力的で、大変輝かしく見えた。今回、知らない土地で活動することの不安さはそう簡単に拭えないことを身をもって知ったが、それを乗り越えて経験できるものはかけがえのないものであると感じた。

菊池葵

今回大学入学時から参加したかったラオス研修に参加することができた。今回の研修のテーマは「豊かさ再考」というテーマであったため、豊かさについて感じたことは多くあったが、実際自分の目で見て最も考えさせられたことは「教育は最も大切である」ということである。特に村でワークショップなどをした際に文字が読めないなどの人が多かったことが印象に残っており、教育というものは新興国では特に重要であると感じた。こうした発展途上国の教育問題について課題が残った。今回の研修では豊かさを再考したと同時に教育という視点からも多くの発見があった。疑問をこれからまた再考していきたいと思う。

草苅世那

ラオスに行く前は、発展途上国の人々は貧しいという先入観があり、勝手に可哀想だと思い込んでいた。しかし村に滞在してみると、子供達はとても純粋で、家族も皆、笑顔で生活していたのが印象的だった。村の伝統を受け継ぎ、試行錯誤をしながら生活している村人を見て、便利な生活だけが豊かだとは限らないのだと感じた。そして何よりも、村人の心の温かさや愛を感じることが出来た。村人やラオスの人にとっても、私達にとっても、互いに幸福とは何か考える良い機会になったのではないかと実感している。私は、自分が経験し感じたことを、一人でも多くの人に伝えていきたい。そして、いつか、村人に恩返しをしたい。

雲田理愛

ラトウアン村と、ラオス大學生に対し、同じワークショップをしたにも関わらず、豊かさの項目では、結果が大きく異なったことに、大変驚いた。村では「お金」が上位に挙がったが、学生間では「環境」が上位に挙がったのである。この違いは、生活環境の違いによるものである、と感じる一方で、「豊かになる」という捉え方の違いも起因しているのではないかと考えた。村では、今現在豊かになるための項目を選ぶ傾向があるが、学生は、将来を意識し、将来も豊かであり続ける為に必要なものを考えるという着眼点を持つ傾向が感じられる。9日間のラオス研修を終え、様々な発見と共に課題が見つかったが、まずはこの着眼点の違いを掘り下げてみたい。

佐藤由理

私は今回、ラオス研修は二回目の参加であり、二年ぶりの参加であった。二年前のノンカム村と今回のLATH・YAN村の違いが見え、比較の目で見ることができた。また、この研修の前にピンチャンのラオスのこどもの事務所でのリコーダー教室を行ったためこども達の様子も都会の子供と村の子供を比較することができた。比較してみてわかったのは、村と都会の子供に対する教育の地域格差と、少数民族の村が抱える問題であった。少数民族であるが故に金銭面で苦労していたり、ラオ語の識字率が低い人がいた。優しくしてくれた村の人々のためにも、将来、このような問題を解決したい、何か恩返しができるいいなと思った。



鈴木のぞみ

二年前もラオス研修に参加し、ラオスにあつて日本にないものがあるということに気がつくことができた。「豊かさ」の定義が自分の中で大きく揺らぎ、それ以降の自分に大きな影響を与えた。今年の研修の事前授業では豊かさ指標を扱った。ラオスはおるか日本人である私達の間でさえ大きく考え方に違いがあることがわかり、「豊かさ」に明確な定義はなく自分で「豊かさだ、幸せだ」と感じることであれば良いのだと思った。日本の豊かさを否定するつもりもないが、ラオスに出会ったことで自分の中の価値観や人生観が大きく変わった。この先の人生の至る場面でラオスから学んだことが生きてくると信じている。

並川裕璃恵

研修では、机に向かつているだけではわからないことが沢山あることに気付いた。村ホームステイでは東京では感じられない人々の温かさやコミュニティの強さを感じ、お金は生活を豊かさにするための道具でしかないことがわかった。私は今回車いすバスケット選手との交流を担当した。WSの結果平等が男女ともに上位に来ていたため、ラオスでは健常者ではないという理由で差別がすごく平等ではないと彼らは感じていると私は考えた。しかし、実際にはバリアフリー化が進んでいないラオスでは生活が不便であるため不平等だと感じていることがわかった。研修で体験したことは自分だけのものにせず様々な人に伝えていきたいと思う。

高野杏利沙

この研修では、充実した、たくさんの身の詰まった九日間を過ごすことができた。村での四日間は、一番印象に強く、ホームステイをしてラオスのリアルな生活を味わうことができ、とても貴重な時間を過ごすことができた。電気も水もない生活、環境に、最初は戸惑いだらけだったが、ゆっくり流れていく時間はとても心地よかった。また、日本では感じることでできない、ラトウアン村の村人達の人の温かさをたくさん感じた。『豊かさ再考』というテーマでこの研修が行われ、様々な場所でワークシOPPを行ったが、ラオス国の中でも色々な豊かさを重視する考え方があることを知れて、とても勉強になった。この研修を通して、今までの自分の考え方が変わり、新たな課題を見つけることができた。

原萌子

私は今回で二度目の研修参加になり、他の研修生とは違った、比較の目で現地を見ることができた。首都ビエンチャンでは、昨年はなかった新しいショッピングモールや店舗ができていたり、街も綺麗に整備されている一方で、昨年に引き続きホームステイに訪れたラトウアン村は、中国が開発したダムの影響で水かさが増し、昨年あったはずの道が水に沈んでいる光景にとっても驚いた。発展を遂げる都市部と、都市部の発展のために犠牲になる農村部との差をまざまざと目の当たりにし、国内での貧富の差を意識する重要性を感じた。しかし、村の人々は昨年と変わらず、外国人である私達を盛大に歓迎して下さり、人々の温かさを改めて実感することができた。

永井詩織

ラオス国際協力研修は今回で二回目の参加であった。一回目は一年の時であった。そのころは、「国際協力」いいこと」と考えていた。しかし、事前授業を受けてその考えは全く違っていた。国際協力の真の難しさを知り、その中で人と人が共生していく面白さを実感した。そして今回は二年間ある程度の知識を持って参加した。二年前に比べ、メンバーもガリリと変わり人が変われば出てくる案も考えも違った。より様々な考え方を知れる機会であった。そして、今もなお起きている問題に私達は何ができるのか、国際協力の在り方はどうなのか悩む日々であったが、変わらないラオスの人の温かさに触れ、共生していける国際協力の面白さに触れるチャンスであった。

藤川恋音

お金でモノやサービスを買って幸福感を感じたり、便利な生活を手に入れることができる私達は、必ずしも同じコミュニティで生活する人々が協力し合わなくとも、また昔の人々の知恵や習慣に頼らなくとも、豊かな生活を送っていくことができるのかもしれない。でも、村全体が一つの家族のように人々のつながりを大切にしながら生きている姿や伝統的な習慣や文化を大切にすると、自然を活かす知恵の素晴らしさに感動し、普段の生活の中では感じることもできないからこそ、私達が失いかけている「心の豊かさ」の大切さに改めて気づかされた。



古谷理恵

なぜわざわざラオスで豊かさを学ぶのか、周りの人に問いかけられたがしっかりとした答えが返せなかった。だが、特に村の生活で、村人同士のコミュニケーションの大切さを見て、ラオスでこそ学べるものだと感じた。子どもはもちろん大人も、話をしに気軽に他人の家の中へ入る。ご飯をおすそ分けし合い、日本から来た私達の活動に楽しそうに協力してくれた。地域のひととの関わりを含め、自分の周りにあるもので生活することは私が味わったことのないものであり、日本とは別の豊かさを感じた。だがそれは外からの視点であり、村人は発展を願っているのが実際である。ラオスで見つけた豊かさが今後どう変わっていくのか興味深い。

三井遥

初めて訪れたラオスでの九日間は、私の豊かさに対する考え方を大きく変化した。特に村でのホームステイでは、家族や村の人の笑顔と温かさに触れながら生活してみる中で、村の人の生きる力強さに圧倒されたとともに、自分一人では何もできない無力さを感じた。自分の置かれた環境の中で家族や仲間と共に精一杯暮らしている姿に、単にお金があることや健康であることが豊かなのではないことを改めて認識できたことはもちろん、外から見ただけでは分からない、一種の豊かな暮らしを発見することができた。この発見を得ることができたことだけでも、ラオス研修に参加して良かったと思う。この発見を今後の活動に活かしていきたい。

堀合優希

ラオス研修の事前学習の時点では、ラオスは開発途上で貧富の差が激しく特に都心部外は十分な生活環境が整っていないなどマイナスのイメージばかり持っていた。そのため研修内容である村でのホームステイは正直やっていけるのか不安であった。しかし実際にやってみると、人の温かさで溢れ、小さくとも強いコミュニケーションがあるとても素敵などころだった。私達をお客様としてではなく本当の家族のように受け入れてくださり、言葉の壁はあっても心で通ずる温かさを感じた。生活面はまだ不便な点が多いが、みんなで協力して補い合って暮らす。人との繋がりを大事にしている。便利が故に日本人が忘れている“豊かさ”が村にはあって自分達の生活を見つめなおすとてもいい経験になった。

三上詩織

このラオス国際協力研修は、私に大きな変化と興味を与えてくれた。大学に入学したのはいいものの、正直自分が何を勉強したいのかよくわからなかった。そんな時に伊藤先生のお話を聞いて国際協力に興味を持ち始め、この研修に参加することを決めた。村でのホームステイは苦労したことも多かったが、ホストファミリーや村の人達の暖かさを強く感じた。特にバーシーの儀式は、言語の壁を越えて伝わるものがあつた。また、村での生活を通して、様々な豊かさの形を知り、改めて自分の生活や考えを見つめ直すきっかけになった。ラオスだけでなく、他国や日本の地方などの豊かさの形も知りたいと思った。この研修での経験を忘れずに、生かしていきたい。

～ラトゥアン村と一緒にホームステイをした ラオスの学生さんからのメッセージ～

Message 01

ホームステイの時みんなと一緒に話す、ごはんの準備や食べるなど、とても楽しかったです。そして、ホームステイの家族と別れるのは寂しかったです。ビエンチャンは電気があって便利ですが、もう一回ラトゥアン村に行きたいです。

Message 02

In Lathan village, there were many traditional things which I couldn't see in Vientiane.
I am not talking about how city life is convenient. People in Lathan were very kind and nice.
The sky I saw at night was very beautiful and it reminded me of my childhood.

振り返り

大岩咲希乃

四月からの授業を含めてこのラオス研修を振り返ってみると、ラオスで過ごした九日間は私達にとって本当に学びの多い、充実したものであったと思う。ラオスに行くまでの授業やラオランチを通してラオスがどのような国か、また「豊かさ」とはどのような要因から生まれるのかなど、徐々にイメージはできてきたが、それでもやはりラオスの人々にとつての「豊かさ」とは何かを考えると、まだ頭の中に「？」が残っていた。各グループがそれぞれ現地で行うアクティビティの準備を進め、不安と楽しみが入り交ざる中、いよいよラオスへ。九日間の研修の中でも特に三泊四日のラトゥアン村でのホームステイ生活は私たちにとても忘れられないものになった。村ではモノが圧倒的に少

なく、トイレを流すには桶に入った山水をすくって流さなければならぬことやお風呂というより私たちがからすれば「水浴び」に近いようなお風呂など、普段生活している環境とは全く異なることに最初は戸惑うことが多く、私たちは戸惑うことが多く、私たちにとって当たり前であった生活環境にありがたみを感じたこともあった。しかし、村での生活は意外と早く自分の中に自然と馴染んでいき、いつの間にか心地よささえ感じるようになった。なぜ日本より不便な生活なはずなのに心地よさを感じるのか、そう疑問に思いながら生活していると、その答えは村人の生活の中にあると気がついた。村ではモノが少ないからこそ生まれる「人とのつながり」が当たり前のようにあり、それが常に誰かが近くにいるという安心感を与えてくれているということ、村人が外国人で



第4章

おわりに

ある私たちのことを本当に歓迎してくれていて、言葉はほとんど通じなくてもコミュニケーションを通して村人の温かさを感じられたこと、そして大自然の中で何かに追われることなく時間がゆっくりと過ぎていくということ。こういった村人の生活そのものが私たちを心地よく感じさせるものなのだと気がついた時、ラオスの人にとつての「豊かさ」とは何か、わかったような気がした。日本に帰ってきた今、また毎日忙しい日々ではあるが、村人から学んだ「豊かさ」を忘れることなく、時々立ち止まって自分の生活を見直す時間をもちたいと思う。

挨拶

平成二八年度、第十七回学習院女子大学ラオス国際協力研修が夏に実施されました。本年度十九名（ラオスへは十六名が渡航）が、学科・学年を超えて参加しました。本研修は、研修の大枠は女子大学が提供いたしました。が、現地、特に世界遺産都市ルアンパバンのラトウアン村での活動は、すべて学生たちが企画・実施いたしました。今年2回目の訪問となる村への訪問・滞在でありましたが、遠いラオスの都市部から離れた村のため、情報が十分でない中、すべてが試行錯誤の連続だった本研修の意義とその成果ははかりしれないものがあります。第一に、現場を可能なかぎりの情報を集めながらイメージし、ラオスでの活動を企画することができました。その描いたイメージと実際のラオスに驚き、とまどいがありました。とまどいから、研修参加者が実際に見て、触れた本当のラオスを知り、理解するこ

とができました。第二に、真の豊かさについて考えることができた。何不自由な生活をしている自分たちの生活を振り返ることができました。そして最後に、研修参加者が触れたやさしさを、今度は研修参加者自身が周囲に伝えていこうという行動につながっています。

本研修の醍醐味は、知る、振り返る、伝えるなど幾十にも可能性を無限に広げることです。一つの出会いが形を変えて、自分や他者の成長につながっています。「使い捨て」社会に生きる中、忘れかけていたモノ・ヒトを大切にすることにはっと気づかされることがしばしばあった研修になっています。豊かな日本のモノにあふれている生活をしていると、あるいはあふれているゆえになのかもしれませんが、昨今は欲求や権利は主張し、自分の責任を認識せずの行動が目につきます。自分の責任はさておき、より多くを求

め、時には周囲・他者を責めて自分の権利を主張する。そんなことが残念ながら少なくありません。自分の責任を認識せずに人に何かを求め続ける、この事実さえにも気づかない人も多いです。二〇〇四年当時、本研修を企画・実施した一つの大きな背景にイラクでの日本人人質事件がありました。人質事件の状況が明らかになる以前から、連日、悲しいまでに誹謗中傷が多く、それらの報道に、心を痛めました。報道される心無い言葉は、自分が行動をしないばかりか、イラクの惨状を知ろうともしない人々からのものが多かったです。こういった様子は10年以上経った今でも変わらず、非常に残念です。

国際協力・援助はグローバルゼーションが進む今日、国際社会のリーダーとして日本が積極的に関わっていかなければならない分野です。それは、必ずしも現場を支援する、現場に行く

ということではありません。関わるということは、まず、自分の生活圏以外のところで、何が起きているのかということ

を、正確に「知る」ということです。本研修参加者が、将来、国際協力に携わらずとも、温かい気持ちで世界で起きていることを知り、見守り、できるかぎりの「一歩」を踏み出すこと

でしょう。本研修の成果や意義はその「一歩」が踏み出されてこそ見出されると思います。研修に関わる準備や振り返りというものは、コミットメントを要するものの意外とできるものです。しかし一連の活動を離れ、研修参加者個人が、さて、いかに研修の机上では学び得なかった体験を普段の生活の中でさらなる行動にうつせるのかと考えた場合、必ずしも容易ではありません。「できるかぎりの一歩」とは申しますものの、行動には多少ならずとも自分をおしてあげる努力をすることも必要で

す。学業、課外活動、バイト、そして就職活動ととにかく忙しい大学生活の中で時間と心の余裕をつくり、ぜひ、その「一歩」が踏み出されますように。

最後に、学生のイニシアティブに賛同し、温かいご協力を賜りました多くの方々、機関の皆様に改めて深く御礼申し上げます。今後ともこの活動に、温かいご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

〈やんこ・・〉

同じ研修も10年以上継続すると、訪問する国も参加者も変化するのが現実です。この数年学生を村落部に引率すると、村での生活に戦々恐々としている学生が多くなりました。水も電気もないわけですから、当たり前と言われれば当たり前ですが、研修開始当時に参加していた学生は村での未知なる生活が体験できることにワクワクしていたし、怖いもの知らずでなんでも挑戦する学生が多かったことを

記憶しています。しかし、この数年は・・・この違いがどこから来るのかはわかりません。こわごわしている学生をみるにつけ、「今時の学生にこういった研修はそぐわないのではないのか、研修やめた方が良いのでは」と、ふと、頭をよぎります。しかし、それを打ち消してくれたのが本年度の研修参加者たちでした。もちろん村に到着した1日目は、例年通り、こわごわ、イヤイヤ。でも、半日もするとあきらめモード、最終日には「けっこう生きていけるかも」とニコニコでした。意外性の発見というのは大切ですね。生きて活かされてゆくことの大切さというものでしょうか。ラオス研修はまだ続けられそうです。

学習院女子大学
国際文化交流学部
国際コミュニケーション学科

教授 伊藤 由紀子

お世話になった方々

【ラオス】

- ラトゥアン村の皆様
 - ラオス国立大学
 - トンワンさん
 - ポーカイさん
- Green Discovery
 - 難民を助ける会
 - ラオスのこども

【日本】

- JTB コーポレートセールス
 - DEAR 近藤牧子氏
- 学習院女子大学教職員・学生・卒業生の皆様
 - 恵雅堂出版株式会社

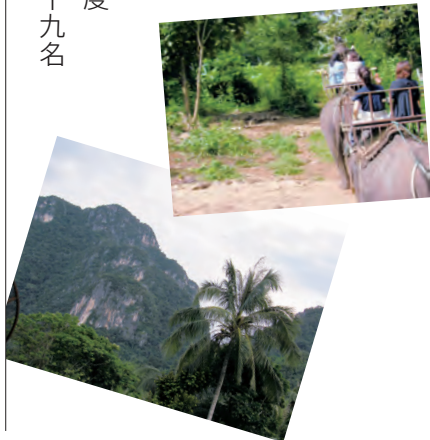
おわりに

今回の研修では、現地の交流において、指標を用いた豊かさ調査を軸に、実際にラオスの人々と交流することで「豊かさとは何か」についてそれぞれが深く考える機会となりました。私達は村でのホームステイを通じ、伝統や文化、コミュニティに実際に触れたことでその大事さに気づき、村の人々の温かさ、力強さに心を打たれました。「豊かさ」とは必ずしもお金やモノがあることだけではないということを感じて学ぶことができました。私達研修参加者のほとんどが初めてのラオス渡航であり戸惑いも多かったですが、たくさんの方々への支えがあったおかげで、たくさんさんの経験や学びを得て帰国することができたのだと思います。そして、これからは報告会や開発教育の活動を通して、ラオスのもつ「豊かさ」を研修参加者全員で協力し、より多くの方々へ発信していこうと考えています

最後となりましたが、本書に最後まで目を通していただきありがとうございます。本書から私達がラオスで体験したこと、感じたもの、学び得たものを少しでも感じていただけることを、研修参加者一同心より祈っています。



平成二十八年度
研修参加者全十九名



宇田川 史織	梅内 優花	永川 愛佳
大岩 咲希乃	奥川 優里奈	菊池 葵
草刈 世那	雲田 理愛	佐藤 由理
鈴木 のぞみ	高野 杏利沙	永井 詩織
並川 裕璃恵	原 萌子	藤川 恋音
古谷 理恵	堀合 優希	三井 遥
三上 詩織		

学習院女子大学ラオス国際協力研修報告書
二〇一六年十月八日 発行

監修 伊藤 由紀子
編集責任者 佐藤 由理
古谷 理恵